

## 『お気に召すまま』における fancy

田邊久美子

Fancy in *As You Like It*

Kumiko TANABE

*The Faculty of Pharmacy, Osaka Medical and Pharmaceutical University, 4-20-1, Nasahara, Takatsuki, Osaka 569-1094, Japan*

(Received October 30, 2022; Accepted December 23, 2022)

**Abstract** This paper discusses the elements of “fancy”, that is, disguise, sight (especially, love at first sight) and figures of speech in William Shakespeare’s *As You Like It* (1599), revolving around the role of the heroine Rosalind disguised as a man who is the representation of fancy in the play. Fancy reverses and unites opposites, and is relevant to inspiration, love, figures in rhetoric, objects, beauty in appearance and otherness. Fancy indicates the passivity of the subject which obeys the object or the other in passion. In other words, love at first sight or fancy in the subject is aroused by looking at the beauty of the object’s appearance (or external beauty). Rosalind makes use of fancy and manipulates Orlando with sight and rhetoric to give him lessons in fancy or love. Similarly, Touchstone as the fool makes use of fancy and reverses and unites opposites, leading to the unity between fancy and true love at the end of the play. Although this paper was originally an extended version on a part of Chapter 1 and 2 of my book *Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy* (Cambridge Scholars Publishing, 2015) as well as on the paper read in my presentation at a seminar of the Shakespeare Society of Japan, held at Konan University on the 2nd October, 2022, it has become much more extensive than before, because I gained new insights and perspective later about the way in which Rosalind disguised as Ganymede and a magician is concerned with alchemy (magic), Diana (Artemis) and Queen Elizabeth I, and I have come to realize that they are the most significant elements of fancy in this play. This paper also discusses variations of fancy with the elements of metamorphosis, Nature, beauty, cheerfulness, the future, the other and abrupt parallelism, and especially marriage seen in the last stage of the experiment of alchemy as the representation of the unity of opposites, which Rosalind as magician or alchemist organizes with Hymen as the god of marriage at the end of *As You Like It*.

- 略号 AYLI *As You Like It*  
 BL *Biographia Literaria*, ed. James Engell and W. Jackson Bate. 2 vols. (Princeton: Princeton University Press, 1983)  
 J *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins*, ed. Humphry House and completed by Graham Storey (London: Oxford University Press, 1959)  
 MP *Modern Painters*, 3 vols, ed. Ernest Rhys (London: Everyman’s Library, 1907)  
 MV *The Merchant of Venice*  
 TN *Twelfth Night*  
 TT *Table Talk (The Collected Works of Samuel Taylor Coleridge, vol. 14)*, ed. Carl Woodring (Princeton: Princeton UP, 1990)

## fancy の定義

本稿ではウィリアム・シェイクスピアが 1599 年に創作した劇、『お気に召すまま』(*As You Like It*) における “fancy” について考察する。また、16 世紀的な意味と同時に 18 世紀ロマン派以降のコールリッジ・ホプキンス・ラスキンの空想概念も考慮しながら、fancy の表象としてのロザリンドの役割と fancy の要素である男装(変装)・視覚・一目ぼれ・詩の修辞などに注目して論じる。fancy は、ひらめき・恋・詩・比喩・修辞性・装飾性・客体・外面・外見と関連し、女性の男装には装飾性と両性具有的な対立の統合、理性と対比される非合理的な fancy の要素が見られる。シェイクスピアの空想については、1631 年にミルトンが “L’Allegro” において、「巧妙なシェイクスピア、空想の子」と述べた。(“Then to the well-trod stage anon, / If Jonson’s learnèd sock be on, / Or sweetest Shakespeare, Fancy’s child, / Warble his native wood-notes wild.”[131-134])<sup>1</sup>。1817 年にコールリッジが『文学的自叙伝』において fancy と imagination を体系的に定義したので、英国ルネサンス期やミルトンの時代には、明確な空想の定義はまだなかったが、*Oxford English Dictionary* (OED) の定義 4a に “Sweetest Shakespeare, Fancy’s child” の用例があり、シェイクスピアの fancy における独創性 (invention) について称えている。(“fancy being used to express aptitude for the invention of illustrative or decorative imagery”)。この詩行でミルトンは、同時代の劇作家ベン・ジョンソンとシェイクスピアの特徴を対比し、ジョンソンが古典の知識に精通しているのに対し、シェイクスピアには独創性がある点を評価している。この詩行で用いられている “fancy” は恋という意味ではないが、シェイクスピアの劇において fancy が重要な意味を持つということを示している。文学作品における fancy について論じた J.C. ロビンソンも

“L’Allegro” を取り上げているので、この詩においてミルトンが用いた “fancy” という語には空想の意味合いが含まれると考えてよいだろう<sup>2</sup>。また、“L’Allegro” というタイトル自体が「快活な人」という意味なので、後述する fancy の特徴としての陽気さと関連している。

コールリッジは後世から俯瞰的に論じ、*Table Talk* において「fancy は無関係なイメージを統合し、imagination はイメージを修飾して多様性に統一を与える」と定義している。

The Fancy brings together images which have no connection natural or moral, but are yoked together by the poet by means of some accidental coincidence... The imagination modifies images, and gives unity to variety; it sees all things in one ... (TT 423)

1808 年 3 月の覚書で、コールリッジはシェイクスピアの時代の作家に fancy がよく見られると述べている。

Fancy, or the aggregative Power...the bringing together images dissimilar in the main by some one point or more of Likeness...distinguished (from wit) ...both common in the writers of Shakespeare’s time.<sup>3</sup>

ラスキンは『近代画家論』において、fancy が事物の外側や細部の多様性/装飾的要素と関連し、fancy の側から見ると真実であることが、別の観点から見ると虚偽であると述べている。

G.M. ホプキンスはコールリッジとラスキンの影響を受け、詩語においてメタファーや比喩と関連する fancy を、対立要素を統合する abrupt parallelism であるとし、異なるイメージを平行に統合する fancy を詩語において重視した。ま

<sup>1</sup> Abrams, M. H, Ed. *The Norton Anthology of English Literature*. Vol. 1. (London: W. W. Norton & Co., 1962), 1414. 下線はすべて著者による。以下同様。

<sup>2</sup> Jeffrey C. Robinson, *Unfettering Poetry: Fancy in British Romanticism* (NY: Palgrave Macmillan, 2006), 88-92.

<sup>3</sup> Coleridge’s *Notebooks: A Selection*. Ed. Seamus Perry (Oxford: Oxford UP, 2002), 99.

た、メタファーにおける両義性が fancy と関連することを指摘し、シェイクスピアの fancy を理想として、男装のヒロインが登場する劇も創作した。空想はイメージの個性を保ちながらパラレリズムにより関連付け、「偶然の一致」は突飛さと驚きを生む。ホプキンは想像力と空想の概念を二種類のパラレリズム－「連続的パラレリズムとしての想像力」と「突飛なパラレリズムとしての空想」－に分類している。「突飛なパラレリズム」はホプキンのメタファーに顕著である。メタファーは全く関連がないと思われる事物同士を結びつけ、そこに共通する驚くべき本質を露にする。このような特徴はシェイクスピアの詩語に顕著であり、ホプキンはシェイクスピアのメタファーやハイフンでつないだ造語における fancy の要素に影響を受け、詩において独自の造語やメタファーを駆使した。

また、ホプキンは音楽家が用いる対位法を彼の詩学に取り入れようと試み、和音のように部分が個性を保ちながらも他の部分と対応し、それらが全体として統合されていると考えた。ホプキンズにとって、空想は主体が客体を忠実に観察し自我を無にして無意識に没入することにより生まれる。キリストの受難やカトリックの聖人の描写に見られる法悦は、主体が客体・無意識に没入し、死を経験してから復活することを意味する。また、空想は真であると同時に偽でもあり、現実と非現実が絶えず交錯する複雑な構造は多義性を表す。ホプキンは事物の外観と内部にある本質の関係について思索し、それを比喩言語、特にメタファーの概念に応用して、「上部思想」と「下部思想」という用語を考案した。つまり、言語には「表層的意味」と「深層の意味」があり、それが言語の二面性を形成するが、詩語は後者に依拠しなくてはならないという信念がホプキンの空想概念に見られ、シェイクスピアの劇における詩語や男装するヒロインを理想とした。さらに、ホプキンズ

はキリスト教の聖餐における実体変化を重視した。聖餐において、キリストの体はパンであり、その血はワインであることが、眼前に提示されるが、これはキリストの受難を反復・表象し、ホプキンズの空想概念と宗教観を一致させるものとなる。

fancy の作用である「対立の統合」という特徴は、中世文学においては異質な要素をパラレルに結びつける手段であり、17世紀形而上詩人の時代にも修辞や conceit において顕著に見られる。16世紀においてはシェイクスピアの詩語における多義性が対立の統合を表し、17世紀以降の詩に影響を与えた。多義性とは対立概念を一つの語句において統合するということであり、コールリッジの fancy の定義に当てはまる。コールリッジやロマン主義批評において、fancy は imagination と対比される二次的なものとしてとらえられてきたが、J.C. ロビンソンはロマン派の詩において、中心としての自己の優位性を表す imagination の言説により周縁に追いやられた fancy の他者性／装飾性／恋／女性性／同性愛的要素／植民地と関連付けている<sup>4</sup>。

16世紀における fancy の“love”という意味は現在でも辞書に定義があり、動詞でも一般的に“love”の意味で使用されているため、ロマン派の時代に廃れたわけではない。一目ぼれと真の愛は対立概念であるが、それらを統合するのが fancy の働きであるため、ヒロインが男装するシェイクスピアの劇にはこのような fancy の特徴が見られる。コールリッジ以降の文学批評においては時代ごとに批評的観点が異なるため、16世紀的な意味も踏まえた上でコールリッジ以降の空想概念も考慮しながら、fancy の表象としてのロザリンドの役割と男装・視覚・一目ぼれ・詩の修辞に注目して論を進めたい。19世紀イギリスではフランス高踏派の詩人に影響を受けた審美主義思想により美が強調され、視覚における美を重視した。ホ

<sup>4</sup> Cf. Chapter One of my book, *Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy* (Cambridge Scholars Publishing, 2015); Kumiko Tanabe, “Fancy, Come Faster: Hopkins’s Poetics of Fancy as the Language of Inspiration” (*The Hopkins Quarterly* Vol. XL, Nos. 1-2 WINTER-SPRING, 2013), 20-24.

プキンズはテニスの詩から審美主義の影響を受けたため、これまでホプキンズの空想概念の研究において、fancyが視覚的美と関連するということについて論じた。<sup>5</sup> 他者・客体の美が主体に視覚的に影響を与えて一目ぼれが生じるが、『お気に召すまま』においてロザリンドの美が強調されていることから、fancyの要素としての視覚的美についても考察する。さらに、『お気に召すまま』において錬金術的イメージが多々見られることに注目し、fancyの対立の統合という特徴が錬金術の理念と一致することについても述べる。

## fancy と「自然」・美・陽気さ・遊戯性・未来

『お気に召すまま』は後半に近づくにつれ陽気さが強調されるが、冒頭は悲劇のように始まる。1幕1場はオーランドの憂鬱な台詞で始まり、“remember”という動詞を用いて過去に想いを馳せている。

As I remember, Adam, it was upon this fashion bequeathed me by will but poor a thousand crowns, and, as thou sayst, charged my brother on his blessing to breed me well – and there begins my sadness. My brother Jaques he keeps at school, and report speaks goldenly of his profit. For my part, he keeps me rustically at home – or, to speak more properly, stays me here at home unkept; for call you that keeping for a gentleman of my birth, that differs not from the stalling of an ox? …

…Besides this nothing that he so plentifully gives me, the something that nature gave me his countenance seems to take from me. He lets me feed with his hinds, bars me the place of a brother, and as much as in him lies, minds my

gentility with my education. This is it, Adam, that grieves me; and the spirit of my father, which I think is within me, begins to mutiny against this servitude. (AYLI 1.1.1-22)

過去を振り返ることは imagination と関連する。オーランドの imagination は“think”や“grieves”という動詞にも表れ、未来や陽気さと関連する fancy と対比される。アダムという名前にはキリスト教的イメージがあり、このイメージはエピソードの直前まで続く<sup>6</sup>。“blessing”にもキリスト教的イメージがある。これと対比されるのがロザリンドの異教的・魔術的・錬金術的イメージである。しかし、このアダムという名前は単にキリスト教的イメージだけではなく、「自然」と関連し、エデンの園を想起させる。森に入る前にアダムはオーランドに“Here is the gold.” (AYLI 2.3.46) と述べて金を渡し彼のお供をする。これはアダムが楽園への道先案内人の役目をして森に行くことにより金を得られるという錬金術的表象である。“Arden”と“Eden”の発音は類似し、森は回復された楽園である。また、オーランドはアーデンの森で恋と知識を見つける<sup>7</sup>。森でロザリンドの fancy の影響を受けることによりオーランドは卑金属から金に変化する。

劇は争いで始まり、善と悪の戦い、腐敗した宮廷とアーデンの森の癒しの世界が対比される。また、出来事がパラレルに起こり、オーランドは兄のオリヴァーに抑圧され、父の公爵は弟フレデリックに領地を篡奪される<sup>8</sup>。この台詞において、オーランドと兄のパラレリズムが見られ、fancy の要素と関連している。“goldenly of his profit”という表現には「金が利益を生む」という錬金術的なイメージが隠されている。“goldenly”は“excellently”という意味で、“profit”は“proficiency (OED, profit, sb. 3) or the benefit it has been to him”という意味があり<sup>9</sup>、オーランドの兄のジェイク

<sup>5</sup> Cf. Chapter Two of Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy.

<sup>6</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 135.

<sup>7</sup> *Ibid.*, 42-43.

<sup>8</sup> *Ibid.*, 97.

イズが成績優秀であることを示している。大学で良い教育を受ける兄が金で表されるのに対し、オーランドは金をほとんど与えられず、田舎の家に閉じ込められているが“part”という語が用いられている。fancy と imagination において部分と全体が意識され、ホプキンスの空想概念における abrupt parallelism は部分が対応する関係を指す。そして、冒頭に見られる部分間のパラレリズムがこの劇全体にちりばめられている。

『お気に召すまま』において、“nature”/Nature (「自然」)「自然」や錬金術と関連する“spirit”という語がよく見られ錬金術的なイメージがある。冒頭のオーランドの台詞においてこれらの単語が象徴的に語られる。錬金術的に考えると、オーランドは自分が「自然」の一部であることを意識している。“rustically”という語は“goldenly”と対比され、田舎の自然と関連する。大学は通常都会の大都市にあるので、これを自然に置き換えると、大学で教育を受けることは手入れされた人工的な庭を意味する。シェイクスピアの時代に宮廷では古典主義的な整形形式庭園が主流であったが、これが「自然」のままのアーデンの森と対比される。原初の「自然」はキリスト教的イメージではエデンの園であり、「自然」を表象する森は異教的には魔術師・錬金術師・妖精の住む世界である。オーランドは田舎にいるにもかかわらず家に閉じ込められて抑圧され、金と対比されると卑金属の状態であるが、“unkept”という過去分詞は“uncared for”を意味し、5-6行目の“keeps”と pun になっている<sup>10</sup>。これを自然に置き換えてみると、手入れされていない、ありのままの自然ということになる。また、オーランドは「牡牛を畜舎に入れる」という比喩を用いて自分を動物に譬え、野生とのつながりを示している。生まれはジェントルマンであるのに、自分の中の獣性が抑圧される状態に反発し、自由と「自然」を求める気持ちを隠して

いる。“nature”という語は、「本性」と「自然」の両方の意味に解釈でき、後述する1幕2場39行目のロザリンドの台詞と結びつく<sup>11</sup>。“countenance”は(a) the way he regards me という意味と、(b) his behaviour towards me という意味を持つ多義性のある詩語である。“hinds”は「奴隷、特に農作業をする労働者」を意味し、ジェントルマンであるオーランドが奴隷のように扱われていることを表す<sup>12</sup>。父の spirit がオーランドの中にあり、抑圧された隷属状態に対して反乱を起こそうとしている。この自由を求める気持ちによりオーランドはロザリンドの fancy と結びつく。

オーランドと闘うレスラーのチャールズはアーデンの森を“the golden world”だと思っている。

They say he is already in the forest of Arden, and  
a many merry men with him; and there live like  
the old Robin Hood of England. They say many  
young gentlemen flock to him every day, and  
fleet the time carelessly, as they did in the golden  
world. (AYLI 1.1.109-113)

この「金の世界」は仕事をしなくてもよく、永遠に春で、動物たちが殺されない世界である。ヘンリー8世の宗教改革以降、カトリックの祝祭は禁止されたので、ロビンフッドの時代の陽気さに対する郷愁をアーデンの森に重ねているのである。しかし、アーデンは教室のような場所で、ロザリンドとタッチストーンは教師の役目をする。ジェイクイズも教えるが、“Cleanse the foul body of th'infected world”という彼の願いは叶わない<sup>13</sup>。これはジェイクイズが完全に fancy の力を持っていないからだろう。この台詞には錬金術のイメージがあるが、次に“If they will patiently receive my medicine.”と述べる。ジェイクイズは道化になればこの世から馬鹿げたことをなくすために浄化し

<sup>9</sup> Ibid., 97.

<sup>10</sup> Ibid., 98.

<sup>11</sup> Ibid., 98.

<sup>12</sup> Ibid., 98.

<sup>13</sup> Ibid., 41-42.

て正常にする<sup>14</sup>。治療薬についても述べているので、ヒーラーとしての魔術師のイメージもある。

ロザリンドは初めから遊戯性や陽気さを伴う恋と関連していることについて述べている<sup>15</sup>。J.C. ロビンソンは“Poetry and Cheerfulness”と題する章で、fancyの要素としての陽気さに注目し、性的な意味合いや遊戯性について論じているが、『お気に召すまま』については触れていない<sup>16</sup>。しかし、陽気さや遊戯性などは『お気に召すまま』に特徴的なのでロビンソンの論も参考にして考察する。

1幕2場で公爵領の篡奪者である公爵の弟フレデリックの娘シーリアは、追放された公爵の娘である従妹のロザリンドに陽気になるようお願いする(“I pray thee Rosalind, sweet my coz, be merry.” [AYLI 1.2.1]) これに対し、ロザリンドは精一杯陽気に見せているが、追放された父のことを忘れられないと述べる。

Dear Celia, I show more mirth than I am  
mistress of, and would you yet were merrier:  
unless you could teach me to forget a banished  
father you must not learn me how to remember  
any extraordinary pleasure. (AYLI 1.2.2-5)

このように、ロザリンドは最初から「陽気に見せる」ことを意識しているが、『お気に召すまま』において陽気さはfancy・視覚・恋と関連し、1幕1場で過去に思いを馳せるオーランドのメランコリーと対比される。また、この台詞において逆の意味の文が並置されていることもfancyの作用と関連している。父が領地を追われ追放されたことは悲劇的要素であるが、fancyの表象としてのロザリンドにはこれから「素晴らしい喜び」が待っているという喜劇的要素を示している。“pleasure”という語は「喜び」であると同時に、恋と関連する「肉体的快樂」も示唆している。恋(fancy)・陽気さ・遊戯性の関連は次のロザリンドとシーリ

アの台詞に示されている。

CELIA …Therefore, my sweet Rose, my dear Rose, be merry.

ROSALIND From henceforth I will, coz, and devise sports. Let me see, what think you of falling in love?

CELIA Marry, I prithee do, to make sport withal; but love no man in good earnest, nor no further in sport neither than with safety of a pure blush thou mayst in honour come off again.

ROSALIND What shall be our sport, then?

CELIA Let us sit and mock the good housewife Fortune from her wheel, that her gifts may henceforth be bestowed equally.

ROSALIND I would we could do so, for her benefits are mightily misplaced; and the bountiful blind woman doth most mistake in her gifts to women.

CELIA 'Tis true; for those that she makes fair she scarce makes honest, and those that she makes honest she makes very ill-favouredly.

ROSALIND Nay, now thou goest from Fortune's office to Nature's. Fortune reigns in gifts of the world, not in the lineaments of Nature.  
*Enter Touchstone the clown*

CELIA No. When Nature hath made a fair creature, may She not by Fortune fall into fire?

(AYLI 1.2.20-42)

<sup>14</sup> *Ibid.*, 146.

<sup>15</sup> *Ibid.*, 13-23.

<sup>16</sup> Robinson, Chapter 3 of *Unfettering Poetry*. 83-108.

これらのロザリンドとシーリアの対話において、陽気・恋・美・未来について述べられ、普通の女性の会話とは思えないような「運命」と「自然」の対比に関する哲学的な議論へと展開してゆく。“devise sports”という言葉においてロザリンドは「何か楽しい遊びを考え出す」と述べ、これから fancy を駆使することと同時に、その後に行われるオーランドとチャールズのレスリングも暗示している。また、哲学的議論において、「自然」が美しい外見を生み、「自然」と対比される「運命」が盲目であると述べていることから、「自然」は盲目ではない、つまり、視覚と関連するということがわかる。この対話はルネサンス期のプラトニズムの重視を反映するプラトンの対話のようでもあり、これから男装して fancy を駆使するロザリンドとシーリアの知性を表している。さらに、この対話中に道化のタッチストーンが登場することから、これから男装するヒロインたちと道化が fancy と関連することが示唆される。このように fancy は「自然」が与えるひらめきと関連し、これからロザリンドは遊び心で思いついた陽気な fancy によりオーランドを操っていくのである。

『お気に召すまま』において、fancy の両義性、現実と仮象の世界の対比、視覚から始まる恋（一目ぼれ）が描写されている。最初にロザリンドは宮廷でオーランドとチャールズのレスリングを見てオーランドに視覚的に恋をするが、彼は上半身裸である可能性が高いので、劇の最初から視覚やフィジカルな面が強調されている。ロザリンドはレスリングの試合に勝ったオーランドに視覚的に恋をするが、fancy は他者の外見的美に視覚的に魅了されて一目ぼれすることと関連している。オーランドもロザリンドの美しさに魅了されて一目ぼれする。（“What passion hangs these weights upon my tongue? I cannot speak to her, yet she urged conference.” [AYLI 1.2.242]）この台詞に示されているように、言葉を駆使して fancy を操るロザリンドと対照的に、オーランドは passion によって

言葉を使えなくされている。つまり、オーランドは他者であるロザリンドの fancy によって passion を引き起こされる受動的な主体となり、ロザリンドに操られるのである。“passion”という語は『お気に召すまま』において8回使用されている。

オーランドは1幕2場の幕切れで、“But heavenly Rosalind!”と述べるが、シェイクスピアの喜劇のヒロインの半分以上が神の性質を持っていると描写されているので<sup>17</sup>、fancy の表象であるロザリンドは神や神の創造した「自然」と関連していることがわかる。「自然」の重視は後述する錬金術と関連する。オグルヴィは「自然に帰れ 生命の原質」という章で次のように述べている。

…錬金術師たちは、「自然」がすべてのものを一体化し、それぞれのもつ個々の性質を支配する原理、すなわち彼らの言う「原質」であると信じ、また、「自然」にあるすべてのものは、自分たち人間に反映され、自分たちが「自然」の一部であるのを知ることとなった。

錬金術師にとって、「自然」の中にある生命を与える普遍的な原質は「精気（スピリット、精神）」であり、万物が独自に持つ本質は、その「魂（ソール）」である…植物が発酵してできたアルコールは植物の精髓なので、英語では「スピリット」と呼ばれる<sup>18</sup>。

『お気に召すまま』において森は「自然」を表している。中心である宮廷から排除されたロザリンドは、男装してギャニミードと名乗り、周縁としてのアーデンの森へ逃げ込む。設定はフランスの森となっているが、これは架空の場所であり、フランスでもイギリスでもあり、空想的でもなじみのある場所でもある<sup>19</sup>。

錬金術的イメージがある金について、1幕3場でロザリンドはシーリアと男装する前に、“Beauty provoketh thieves sooner than gold.” (1.3.109)と述べて美が金に勝ると述べている。これは女性

<sup>17</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 117.

<sup>18</sup> ガイ・オグルヴィ著、藤岡啓介訳『錬金術—秘密の「知」の実験室』（創元社、2012年）、8。

<sup>19</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 11.

の美が fancy により男性を視覚的に惹きつける力を持つことを示している。ロザリンドは森で変装という fancy の要素を身にまとして、オーランドに再会し、女性としての自分に思いを寄せるオーランドを男装により視覚的に欺くが、彼女の fancy は、オーランドの真の愛を確かめる手段となる。森はエリザベス1世の時代、男女の逢引の場所だったので愛や pleasure と関連すると同時に狩猟の場である、つまり、森や「自然」は恋が花開く「fancy の領域」である<sup>20</sup>。また、ケンブリッジ版は『お気に召すまま』の「明るさ・陽気さ・笑い」の要素について述べ、“sparkling”という語を用いているが<sup>21</sup>、後述するように、これは fancy と関連する特徴である。森は他者、つまり、男女が出会う場であり、自分の中にある他者と出会う場でもある。ロザリンドはギャニミードになるが、ギリシャ神話のガニユメデスはゼウスに愛されたことから同性愛的イメージがある。そして、この劇では、冬と春、「自然」と「運命」、牧歌的なファンタジーと田舎のリアリティ、キリスト教と異教的なロザリンドの白魔術という対立要素が見られる<sup>22</sup>。しかし、『お気に召すまま』において錬金術的表象が多々見られることから、ロザリンドを錬金術師として見る方が良いだろう。

## fancy と視覚・変装・修辞・他者性・突飛さ

『お気に召すまま』では詩や韻文における言葉の綾が fancy と密接に関わっている。ロザリンドはオーランドのことを“fancy-monger” (AYLI 3.2.347) と呼ぶ。

If I could meet that fancy-monger, I would give  
him some good counsel, for he seems to have the

quotidian of love upon him. (AYLI 3.2.347-349)

この“fancy-monger”はハイフンで語をつなぐシェイクスピアの造語と思われ、“dealer in love”「恋を売り歩く人」,<sup>23</sup>“purveyor of fantasies”「恋を提供する人・商人」,<sup>24</sup>“coiner of fantasies; also one who incites love”「恋の偽金造り・考案者、恋心を駆り立てる人」という意味がある。<sup>25</sup>“fancy”や“fantastical”という語は『お気に召すまま』において『ヴェニス商人』より多用されている。ロザリンドとオーランドの言葉のやり取りには、fancy・恋・詩の関連が示されている。ロザリンドは男装した彼女を自分の恋人と想像して口説かせることでオーランドの恋の病を治すことを提案する。

…He was to imagine  
me his love, his mistress; and I set him every day  
to woo me. At which time would I, being but a  
moonish youth, grieve, be effeminate,  
changeable, longing and liking, proud,  
fantastical, apish, shallow, inconstant  
…  
for every passion something,  
and for no passion truly anything, as boys and  
women are for the most part cattle of this colour  
– would now like him, now loathe him; then  
entertain him…that I drave my suitor from his  
mad humour of love to a living humour of  
madness… (AYLI 3.2.387-400)

Jonathan Bate がウィリアム・ブレイクの詩 *Jerusalem* と *A Vision of the Last Judgement* において太陽と imagination を関連させているように、ロマン派の詩学において太陽は imagination と関連し月は fancy と関連している<sup>26</sup>。このような解

<sup>20</sup> *Ibid.*, 2.

<sup>21</sup> *Ibid.*, 1.

<sup>22</sup> *Ibid.*, 4.

<sup>23</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 170.

<sup>24</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 160.

<sup>25</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. (London: The Arden Shakespeare, 2020), 260.



積から、太陽が男性／自我／中心を表象するのに対し、月は女性／周縁／他者を表象していると考えられる。fancy は女性的で移り気な他者としての月と関連し、「気まぐれ」(moonish) という特徴を持っている。ロザリンドは、自分のことを「謎めいている・空想的」(fantastical) であるとし、fancy の装飾的要素である形容詞を並べ立てる。アーデン版ではこの“fantastical”について、“full of extravagant fancies”と注釈しているので<sup>27</sup>、ロザリンドが様々な fancy を駆使していることがわかる。ケンブリッジ版では“capricious”という注釈があり<sup>28</sup>、「気まぐれな空想」を表す語であると考えられる。男装して自分自身を演じることにより複雑な劇中劇を演出するロザリンドは、自分の思いついた fancy によって変装し、真実を隠してオーランドを操り、最後には中心と周縁を逆転させるのである。

『文学的自叙伝』第13章でコールリッジは imagination が主体的精神の能動性や意志・理性と関連して客体を融解するのに対し、fancy は客体の固定性や悟性と関連し、精神の受動的機能であると定義している (BL I 304-305)。imagination と fancy はどちらも主体と客体の相互作用により生まれるが、imagination が能動的な自我が意識的に客体を取り込み変容する機能であるのに対し、fancy は客体に対して受動的な主体が無意識的に客体に没入し同化することにより、客体の本質を導き出す<sup>29</sup>。コールリッジの imagination と fancy の定義を参照すると、imagination は自我によって生まれるので「思い込み」ということになる。

3幕4場で、羊飼いのシルヴィアスとフィービーのやり取りを、羊飼いのコリンは「野外劇」と呼ぶ。これに対し、ロザリンドもその劇の役者になって忙しく立ち回ることにすると述べ、“sight”という語により視覚を強調している。

CORIN If you will see a pageant truly played Between the pale complexion of true love And the red glow of scorn and proud disdain, Go hence a little, and I shall conduct you, If you will mark it.

ROSLIND O come, let us remove. The sight of lovers feedeth those in love. (*To Corin*) Bring us to this sight, and you shall say I'll prove a busy actor in their play. (AYLI 3.4.47-55)

3幕5場のフィービーの台詞では「目」(eye) という語が何度も繰り返され、視覚によって生まれる恋が強調されている。

Thou tell'st me there is murder in mine eye.  
'Tis pretty sure, and very probable,  
That eyes, that are the frail'st and softest things,  
Who shut their coward gates on anatomies,  
Should be called tyrants, butchers, murderers.  
Now I do frown on thee with all my heart,  
And if mine eyes can wound, now fall down;  
Or if thou canst not, O, for shame, for shame,  
Lie not, to say mine eyes are murderers.  
Now show the wound mine eye hath made in thee. (AYLI 3.5.10-20)

フィービーは自分の「目が人を殺す」というシルヴィアスの言葉に反発する。しかし、『ヴェニス商人』では、ポーシャの詩において、恋は目に宿ると歌われている。

Tell me where is fancy bred,

<sup>26</sup> Jonathan Bate, *Shakespeare and the English Romantic Imagination* (Oxford: Clarendon Press, 1989), 155.

<sup>27</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. (London: The Arden Shakespeare, 2020), 263.

<sup>28</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattanway (NY: Cambridge UP, 2009), 161.

<sup>29</sup> Kathleen Coburn, *The Self-Conscious Imagination: A Study of the Coleridge's Notebooks in Celebration of the Bi-centenary of his Birth 21 October 1772*. London: Oxford University Press, 1974, 13.

Or in the heart or in the head,

(AYLI 2.4.22-28)

...

It is engend'ed in the eye,

With gazing fed, and fancy dies

In the cradle where it lies.

Let us all ring fancy's knell. (MV 3.2.63-70)

この詩で歌われているように、恋をしたものは相手に自我をばく奪される。これは主体の無効化・死を意味する。『お気に召すまま』において、シルヴィアスはこれを「恋の魔力」(the power of fancy) であると述べる。

If ever – as that ever may be near –

You meet in some fresh cheek the power of fancy,

Then shall you know the wounds invisible

That love's keen arrows make. (AYLI 3.5.29-32)

3幕2場における“fancy-monger”と関連して、“power of fancy”は恋心を駆り立て<sup>30</sup>、欲望を生み出す力である<sup>31</sup>。この直後に fancy の表象としての男装したロザリンドが登場する。視覚に欺かれて彼女を魅力的な男性と思い一目ぼれしたフィービーは、マーローの“Who ever loved that not at first sight?”という言葉を用いし (AYLI 3.5.82)、自分もロザリンドの fancy にとらわれてしまう。また、“fantasy”という語は通例「空想」の意味だが、2幕4場のシルヴィアスの台詞では、“desire”の意味で使用されている<sup>32</sup>。

No, Corin, being old thou canst not guess,

Through in thy youth thou wast as true a lover

As ever sighed upon a midnight pillow.

But if thy love were ever like to mine –

As sure I think did never man love so –

How many actions most ridiculous

Hast thou been drawn to by thy fantasy?

この台詞において、オーランドと同じく男性の恋はため息やメランコリーと関連し、“think”という動詞を用いて理性的な思考である imagination の働きを示している。また、空想である“fantasy”について語っているので、語や音の反復が特徴的な点で fancy の要素である修辭を表している。さらに、“if”を用いて仮定法過去を使用している点において空想の働きを表している。

続けてシルヴィアスは恋と“passion”について述べている。

O, thou didst then never love so heartily.

If thou rememberest not the slightest folly

That ever love did make thee run into,

Thou hast not loved.

Or if thou hast not broke from company

Abruptly, as my passion now makes me,

Thou hast not loved.

O, Phoebe, Phoebe, Phoebe! (AYLI 2.4.30-40)

この台詞において、語句の反復や fancy の影響を受けて一目ぼれをした男性が愚かになること、そして、一目ぼれや passion が突飛さと関連していることが示されている。“passion”は“strong amorous feeling”であり<sup>33</sup> fancy や love と同義である。オックスフォード英英辞典によると、passion の語源は“suffer”を意味するラテン語の“pati”に由来し、後期ラテン語の“passio”は主にキリスト教の神学に関連する。つまり、究極的にはキリストの受難に関連する語である。受難は主体の死を意味する。これは愛や一目ぼれに適用することができる。主体が突然視覚的に客体に一目ぼれし、自我を喪失して客体に没入する行為である。このように passion は fancy や love と関連し、理性のある男性を愚かにする。この台詞において、

<sup>30</sup> William Shakespeare, *As You Like It*, Ed. Juliet Dusinberre. (London: The Arden Shakespeare, 2020), 278.

<sup>31</sup> William Shakespeare, *As You Like It*, Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 171.

<sup>32</sup> William Shakespeare, *As You Like It*, Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 135.

<sup>33</sup> *Ibid.*

感嘆符が最初と最後に使用され強調されているが、シルヴィアスがフィービーの fancy の力により愚かになってしまったことを示している。男装のロザリンドがオランダに行使用するように、fancy は女性が男性に対して行使する力であり、男女の優位性を逆転させるのである。また、フィービーという名前には「輝くもの、月の女神アルテミス(ディアナ)」という意味があるので<sup>34</sup>、フィービーもロザリンドと同様に月の女神ディアナ・女性性・fancy と関連する。この後、シーリアは金について述べている。

I pray you, one of you question you man  
If he for gold will give us any food.  
I faith almost to death. (AYLI 2.4.60-62)

錬金術的表象における死と復活は受難を模倣しているのだろう。キリスト教における聖餐が受難を表すように、キリストの体であるパンが食べられるということが、この台詞に示唆され passion を反復している。次にロザリンドも金について述べている。

I prithee, shepherd, if that love or gold  
Can in this desert place buy entertainment,  
Bring us where we may rest ourselves, and feed.  
Here's a young maid with travel much oppressed,  
And faints for succour. (AYLI 2.4.70-74)

この台詞において愛と金が対比され、食べ物についても描写されている。“entertainment”は“food and shelter”を意味するので<sup>35</sup>、錬金術・聖餐・受難のイメージがここでも重なり合うと同時に fancy の遊戯性とも関連している。また、法悦と死によって神と合一し救いを得る殉教者の passion のイメージも見られる。羊飼いコリンの次の台詞もこれらのイメージを引き継いでいる。

Go with me. If you like upon report  
The soil, the profit, and this kind of life,  
I will your very faithful feeder be,  
And buy it with your gold right suddenly.  
(AYLI 2.4.95-99)

ここで“gold”という語とキリストの受難・聖餐のイメージが反復され、最後に羊飼いコリンの台詞で締めくくられているので、コリンは神の忠実な羊飼いであるキリストの表象であると考えられる。『お気に召すまま』において、羊飼いが“faithful”とされているからだ。そして、これらのイメージは音楽の受難曲のように反復され、音楽が fancy の糧であるということを示唆している。錬金術と関連するグノーシス主義が異端と考えられたのはキリスト教と異教的イメージが結びついているからであるが、『お気に召すまま』においても錬金術やグノーシス主義の影響が見られる。

シルヴィアスやコリンの台詞で述べられた“Abruptly”や“suddenly”という語は fancy と関連する。究極的には、突飛さはキリスト教的には神の奇跡の特徴であり、奇跡はあり得ないことを突然現実にして眼前に提示する。それは魔術や錬金術においても言えることである。そして、奇跡を可能にするのがロザリンドの fancy である。ロザリンドは対立の統合の表象であり、キリスト教的には神と人間の合一であるキリストを表象する。キリストや神の奇跡はカトリックの司祭となったホプキンズの空想概念の基礎となっている。ホプキンズは精神の機能について imagination が能動的、fancy が受動的な働きであるとし、fancy としての abrupt parallelism の定義について述べている(J 125-26)。後にカトリックの司祭となったホプキンズにとって、受動的に客体を観察する行為である観想から生まれる fancy は、人間と神を結びつけるキリストの受難を意味するようになる。この点において、ホプキンズにとっては観想生活において「人間は神から注がれる恩寵によって受動

<sup>34</sup> Ibid.

<sup>35</sup> Ibid., 137.

的に神のものとされ、神のうちに生き、神を観るものとなる。[加藤信朗]（日本大百科事典）後述するように、『お気に召すまま』では、キリスト教的意味を含む fancy の概念が見られる箇所がある。ホプキンズは fancy としての abrupt parallelism について、fancy は隠喩・直喩・寓話などに示されると述べている（J85）。

『お気に召すまま』においては fancy としての abrupt parallelism が強調されていると考えるが、岡村俊明はこの劇における様々な「唐突さ、突飛さ」について、「ロザリンドに対するフィービーの愛の終わりが、どうしてシルヴィアスとの結婚にまで結びつくのか。その結婚に至る唐突さが理解困難な点である」と述べる。

ロザリンドとオーランドも一目見て恋をしたものだし、『ロミオとジュリエット』におけるロミオは、それまでロザリンドを愛していたにも関わらず、ジュリエットを一目見て恋してしまったのである。恋とはこのような突飛さが伴うものである。

問題なのは、ロザリンドとオーランドの恋は一目惚れの恋であるにしても、それは劇の前半に置かれていて、それについて、その経過、発展も含めて、十分に描きこまれているのに反して、今考えている二組の恋は最終幕に置かれ、それについての十分な説明がないことが突飛だという印象を与えるのである<sup>36</sup>。

岡村が後述するように、「変装とは見破れないものだとの前提で劇は進行している」ので、このような「突飛さ」は、ロザリンドを少年が演じたように、エリザベス朝演劇において周知のことであるがゆえに、ホプキンズの述べる fancy の abrupt parallelism は、シェイクスピアの喜劇において当然のように用いられていたと考えられる。それゆえに、ホプキンズはシェイクスピアの喜劇

から空想概念を得たのだろう。岡村は『お気に召すまま』という劇における4つの理解できない点について論じているが、fancy は対立要素の統合において突飛さを伴うものであるがゆえに、理性や imagination で理解できるものではないということを、fancy そのものであるこの劇が実証していると言えるのではないだろうか。

## ギャニミードとしてのロザリンドと fancy

森で変装している時のロザリンドはギャニミードと名乗るが、この名はギリシャ神話のガニユメデスのフランス語の発音である。ギリシャのホメロスによると、ガニユメデスはトロイアの伝説上の王トロスの息子で羊飼いをしていたが、美貌の少年であったためゼウスに見初められ、天上界に連れて行かれ、神々の酌係とされた。この神話はギリシャにおける同性愛的趣向のゆえに大いに愛好されることとなった。ローマのオウィディウスによると、ガニユメデスは鷲に変身したゼウスによって、オリュンポス山にさらわれる。ルネサンスの人文主義者たちは、この物語を、人間の魂の天上界への、神への回帰の寓意として捉えた<sup>37</sup>。森のはずれの空き地で森番の身なりをしてギャニミードとなったロザリンドはジュピターに呼びかける。ジュピターはゼウスのことなので、ギリシャ神話のガニユメデスと呼応する。

このガニユメデスについて図像を参照する<sup>38</sup>。『お気に召すまま』が創作される以前に存在するのが、ルネサンス期の画家ジュリオ・カンパニョーラの版画、“Ganymede as a young boy riding a large eagle (Zeus) in flight above a landscape” (circa 1500-1505) である。(Fig. 1) この図像ではガニユメデスが鷲に姿を変えたゼウスに誘拐されているように見えない。タイトルは後世につけられたものと考えられるが、「さらわれた」のではなく「鷲に乗っている」と描写されている。17世紀の画

<sup>36</sup> 岡村俊明『シェイクスピアを読む』, 152-153.

<sup>37</sup> 木島俊介監修『ギユスターヴ・モロー』(東京新聞, 2005年), 96.

<sup>38</sup> 図像 1-4 はすべて Wikimedia Commons から使用する。

家ソフィア・ブレゼンドルフの二つの図像においても、タイトルは「ガニュメデスの略奪」(“The Rape of Ganymede” [1694])となっているが、ガニュメデスは鷲の上に乗って天上界に飛翔している (Fig. 2 & 3).

16, 17世紀のガニュメデスの図像と19世紀フランスの画家ギュスターヴ・モローの“The Chimera” (1867)を比較すると驚くほど類似している。(Fig. 4)フランス語の「キマイラ」(Chimère)には、「空想」、「夢想」という意味がある<sup>39</sup>。モロー

の絵では男性ではなく女性がキマイラにしがみついて飛翔する。つまり、空想が女性と関連することを示唆している。さらに、「空想」“La Fantasia” (1879)というタイトルの絵においても同様に、女性が空想にしがみついて共にする (Fig. 5)。これらの図像の関連は、森で男装してギャニミードとなる fancy の表象としてのロザリンドと結びつく。

1860年代では、フランスの高踏派の詩人やヴィクトリア朝のイギリスの詩や芸術は、修辞や装飾、



Fig. 1



Fig. 2



Fig. 3



Fig. 4

<sup>39</sup> 木島俊介監修『ギュスターヴ・モロー』, 98.



Fig. 5

客体の視覚的美を強調する空想の要素を重視した。モローやピュヴィス・ドゥ・シャヴァンヌは空想の飛翔という主題を描いて、この時代にロマン主義的な想像力よりも空想が重視されたことを示した。フランス語では高踏派の詩人を総称して“Parnassiens”と呼ぶが、ホプキンズは詩語の分類において「パルナシアン」(Parnassian)という用語を「靈感の言葉」(the language of inspiration)の下位にあるとしている。ホプキンズの空想は「靈感の言葉」であり、「パルナシアン」は靈感がない修辞のことを表しているが、19世紀における修辞の重視を反映した用語であると考えられる。本来、「パルナシアン」とは名詞的には「パルナソスの住人、あるいは、そこに関連する人」の意であり、「パルナソス」はギリシャの高峰を指す。ローマの詩人たちはこの山を詩人ミューズたちの住みかと考えた。故に、モローの絵の女性はfancyによってパルナソスへと飛翔することを表

している<sup>40</sup>。

ホプキンズは「灵感の言葉」である fancy の概念についてラスキンの fancy の描写に影響を受けたと思われる。ラスキンはロマン派の「感傷的虚偽」を批判し、fancy は客体の観想により生まれ、感情に左右されるべきではないと考えた。よって、感情に左右されるオーランドと対照的に、fancy を表象するロザリンドは常に冷静にオーランドを言葉で操っている。また、ラスキンは fancy の特性について次のように述べている。「…物事のコル心にある想像力は、その核心で平衡を保ってじっとして静穏で熟考し、その周りのすべてを直視する。だが、物事の外側にとどまる空想は、同時にすべてを見ることはできない。あちこちと走り回り、さらに多くを見ようとして、陽気に飛び跳ねて派手にふるまっても、一点だけに固執して、決して全体を包括して見ない。この一点から、空想はアナロジーを案出し類似性をとらえることができる。空想が見る点に関する限り、その類似は真実であるが、空想が別の観点を通して見ることができるとすれば、その類似は虚偽になるだろう。しかし、空想はこんなことは気にしない。(それら二つの観点の)接触点は空想にとって十分であり、たとえその二つの観点の間に割れ目が残っていて、両者が接触しないとしても、空想は電気火花(an electric spark)のように一方から他方へ跳躍して、その飛ぶ瞬間に輝いて見える。」(MP II 182-183)<sup>41</sup>

このような fancy の描写はギャニミードとしてのロザリンドと一致すると同時に、後述する道化にも関連する。ホプキンズはシェイクスピアの fancy の影響を受け、男装のヒロインが登場する劇‘Floris in Italy’を創作したが、この未完の劇において‘sparky fancy’という比喩を用いている。この比喩はラスキンの描写する fancy の‘electric spark’の影響であると同時に、『お気に召すまま』の目の描写の影響もあると考えられる。1幕2場でシーリアは、「私の目から雷を放てるものなら、

<sup>40</sup> Cf. Chapter Two of my book, *Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy*.

<sup>41</sup> 日本語訳は、内藤史朗訳『構想力の芸術思想 [近代画家論・原理編Ⅱ]』(法蔵館)を参照。

この辺でもう勝敗を決めてしまいたいのでくれど」と述べる。 (“If I had a thunderbolt in mine eye, I can tell who should down.” [AYLI 1.2.198]) ロザリンドとシーリアはこの時レスリングの試合を見ている、つまり、視覚と関連する fancy が雷の放電と関連し、“If” という仮定法過去も空想の働きを表している。また、レスリングは遊戯性と関連するので、fancy の要素である。そして、試合の前に身の安全のため中止してほしいと頼むロザリンドとシーリアに対し、オーランドは二人の美をたたえながら断っている。

I beseech you, punish me not with your hard thoughts, wherein I confess me much guilty to deny so fair and excellent ladies anything. But let your fair eyes and gentle wishes go with me to my trial, wherein if I be foiled, there is but one shamed that was never gracious, if killed, but one dead that is willing to do so.

(AYLI 1.2.168-173)

オーランドはロザリンドとシーリアの美、特に目の美しさについて述べていることから、これからレスリングの試合を観戦する二人の視覚と美が fancy と関連することを示唆し、“if” を何度も用いて fancy を強調している。この試合でオーランドはチャールズをうち倒し、それが契機となって試合を見ていたロザリンドを強く愛することになる。試合を見たロザリンドも視覚的にオーランドに魅了されることから、視覚や美が fancy と関連することがわかる。

### fancy と魔術・錬金術・結婚

森は fancy が支配する世界であり、ロザリンドは、“Then there is no true lover in the forest, else sighing every minute and groaning every hour would detect the lazy foot of time as well as a clock” (AYLI 3.2.293-295) と述べている。森には“true love”はなく、最後に対立を統合する fancy の作用により真の愛となる。ロザリンドが行使する fancy の力

は魔術と関連する。

3幕2場のロザリンドの台詞には、視覚による他者への恋 (fancy) によって自我が影響を受けることが示唆される。視覚や一目ぼれについては5幕2場のオーランドの台詞にも示されている。

Is't possible that on so little acquaintance you should like her? That but seeing, you should love her? And loving, woo? And wooing, she should grant? (AYLI 5.2.1-3)

『十二夜』冒頭の “If music be the food of love” という台詞と関連して、『お気に召すまま』でオーランドの兄のオリヴァーは、fancy における対立の統合について述べている。

When last the young Orlando parted from you, He left a promise to return again Within an hour, and pacing through the forest, Chewing the food of sweet and bitter fancy, Lo what befell. He threw his eye aside – And mark what object did present itself: Under an old oak, whose boughs were mossed with age And high top bald with dry antiquity, A wretched, ragged man, o'ergrown with hair, Lay sleeping on his back. About his neck A green and gilded snake had wreathed his neck Who with her head, nimble in threats, approached The opening of his mouth. But suddenly Seeing Orlando, it unlinked itself, And with indented glides did slip away Into a bush, under which bush's shade A lioness, with udders all drawn dry, Lay couching, head on ground, with catlike watch The royal disposition of that beast To prey on nothing that doth seem as dead. This seen, Orlando did approach the man And found it was his brother, his elder brother.

(AYLI 4.3. 99-121)

“the food of sweet and bitter fancy”において“fancy”は“love”と同義であり、『十二夜』と同様に恋が食物にたとえられ、「甘辛い恋」として対立要素が統合される。fancyは恋と音楽と食物と関連して祝祭的なので、対立の統合の表象であるロザリンドの“holiday humour”と関連する。また、fancyの要素である視覚を表す語や突飛さを表す“suddenly”という語が用いられている。“mark what object did present itself”という表現においても、「客体を見る」行為が示されるのでfancyと関連する。

この長い台詞において同じ語や似た表現の反復が詩的で象徴的に語られ、錬金術的イメージがある。錬金術や魔術において呪文は詩的な語句を反

復して唱えられるので、ロザリンドや道化が駆使する修辞と関連する。錬金術師や魔術師は人里離れた森に住む隠者であるが、この台詞ではオーランドの兄が森の隠者のように描写される。緑色の蛇はFig. 6と7の錬金術の図像を彷彿とさせる<sup>42</sup>。雌獅子はFig. 8の左上の錬金術の図像にも見られ、その上に女性が座っているので女性と関連している。ロザリンドの台詞もこの図像を彷彿とさせる。（“But to Orlando. Did he leave him there, Food to the sucked and hungry lioness?” [AYLI 4.3. 124-125]）Fig. 9は血を食らう獅子の図像であり、オーランドが獅子に腕を食い裂かれ血を流すことと関連している<sup>43</sup>。オグルヴィは『錬金術－秘密の「知」の実験室』の「硫黄と水銀－対立物の調



Fig. 6



Fig. 7

<sup>42</sup> Fig. 6「杯のなかのヒドラ（多頭蛇）は錬金液薬（エリキサー）を象徴し、また自然の三界にたいしてそれが三重に支配していることを象徴しているが、一方、三頭に岐れた蛇は統一が三位一体から三頭の竜は作業の成功が三重の溶解に基づいていることを思い起こさせるだろう。\*『哲学の薔薇園』（Rosarium philosophorum）16世紀、ヴァデアーナ市立図書館蔵。」スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著、種村季弘訳『錬金術－精神変容の秘術』、39; Fig. 7「おのれみずからの尾を食う竜（ドラゴン）であるウロボロス（宇宙蛇）は、宇宙の永遠性と循環性の象徴である（「一者に始まり一者に終わる」）。錬金術の絵画作品において必ずそうであるように、ここでも色彩はメッセージを表す不可欠の要素である。すなわち緑色は発端の色、赤は大なる作業の目的となる。\*テオドロス・ペレカノスによるシュネジウスの写本、1478年、パリ国立図書館蔵。」(Ibid., 18)



和」において、次のように述べる。「水銀は『精気』とみられていて、生命の力、万物の『普遍的な魂』である。水銀は受動的で、女性的であり、冷たく、湿っていて、火で永遠の女性『プリマ・マテリア』である。すなわち、第一物質であり、母体であり、万物の母である。精錬されていないとき、水銀は『ドラゴン』、『蛇』、『緑のライオン』をシンボルとし、『白い女』が行為につくと『白い王妃』あ

るいは『白いライオン』、『ユニコーン（一角獣）』あるいは『月』、あるいは『自然の中のところ女神性』となる」<sup>44</sup>。

『お気に召すまま』において fancy と関連する月、蛇、ライオンの錬金術的イメージが見られ、月の女神ディアナの冷たさや純潔について述べられている。ディアナはゼウスとティタン族のレトの子で、太陽神アポロンと双子である。若く美しい



Fig. 8

<sup>43</sup> Fig. 9 「『哲学の薔薇園』 (*Rosarium philosophorum*) の挿絵から採ったこの緑色の獅子は、しばしば太陽を食っているものとみなされてきたが、しかしどうやら血を食らっていると見る方が真実味があるようだ。獅子の色は、この獅子が緑色の、生な根源状態にあることを示し、これから硫黄の元素と水銀の元素が抽出される母胎である。『緑色の獅子の血』は錬金術の伝承によれば『ヘルメスの水銀』であり、獅子はこれを太陽（道士の硫黄）といっしょに吐き出すのである。」 (*Ibid.*, 39)

<sup>44</sup> ガイ・オグルヴィ著、藤岡啓介訳『錬金術—秘密の「知」の実験室』, 10.



Fig. 9

ディアナは狩りを好み、弓矢で武装して森を駆け巡り、鹿を追う<sup>45</sup>。錬金術の図像において、ゼウスは鷲で太陽であるアポロンは月と結婚する。オグルヴィは太陽と月について次のように述べている。「太陽は生命力であり、意識であり、個々の人のソール（魂）である。太陽は硫黄に対応し、熱い、乾燥した、男性的な原質、活発な、感情を発生させる種であり、『石の父』と呼ばれている。太陽の影響は恵み深く、しかし、過剰であると高すぎるプライドやエゴの元になる。『月』の影響で冷却し、加湿しなければ、乾ききって燃えてしまう。太陽は心と活力と意志力を支配し、生理学的には、心臓、眼、循環系など健康全般を支配する。月は情感、本能、潜在意識を支配する。女性的、母性的、養育的、内省的、可変的である。大洋の水、植物の液汁（樹液）、体内にあるすべての流体は月の影響を受け…万物は、月の運行とリズムをもとに成長する。夢、情感、官能、直覚を支配する。月の暗黒面は、無意識で粗野であり低劣な本能である。太陽の花嫁、ギリシアの月の女神ディアナである。月は白い女王、白いライオンであり、金属を銀に変える。不死の秘薬エリク

シルである。太陽が硫黄で、月は水銀である。それはすなわち、冷たい、湿った、受動的な、女性的原質であり、硫黄の種を受胎し、半陰陽者の子供を得る。」<sup>46</sup>

森で fancy を操るロザリンドは最後にオーランドと結婚するが、錬金術の図像においては太陽と月の結婚=合一がなされるので、ロザリンドは錬金術的イメージと一致する。オグルヴィは「化学の結婚 太陽と月の結婚」という章で次のように述べている。「『魂』と『精気』の両者が有限である状態（肉体）から解放されると、両者の『原質』は純化され、調和され、こうして初めて両者の聖なる結合が行われる。これが、『赤い王』と『白い王妃』との科学的な結婚である。この結合による子が超越的な両性具有の子、『精気』が吹き込まれた子である。」<sup>47</sup>

これらの太陽と月の結婚の錬金術的イメージから考察すると、オーランドは森で雌獅子と戦い血を流すので「赤い王」と対応し、雌獅子は女性的要素を表す。錬金術のプロセスにおいて最終段階の結婚に至るまでは対立物の争いが繰り返され最終的に合一に至るが、1幕は公爵の争いで始まり、オーランドとチャールズのレスリングの試合があり、森でのオーランドと雌獅子の戦いが描写され、最終的に対立の統合の象徴として4組の男女の結婚に至る。fancyの表象であるロザリンドがディアナであると同時に両性具有の子ヘルマフロディトスとして描写されているのは、ロザリンドが魔術師であり変幻自在な fancy の特徴を表しているからだ。

獅子と戦ったオーランドの血を見せられ気を失ったロザリンドは、オリヴァーに本当に男であるかを疑われ、気を失った芝居をしたと述べる。

ROSALIND I do so, I confess it. Ah, sirrah, a body would think this was well counterfeited. I pray you, tell your brother how well I

<sup>45</sup> 木村泰司監修『名画で読む！神話とおとぎ話の世界』（公栄社、2016年）、27。

<sup>46</sup> ガイ・オグルヴィ著、藤岡啓介訳『錬金術—秘密の「知」の実験室』、56-57。

<sup>47</sup> *Ibid.*, 12-13.

counterfeited. Heigh-ho!

OLIVER This was not counterfeit. There is too great Testimony in your complexion that it was a passion of earnest.

ROSALIND Counterfeit, I assure you.

OLIVER Well then, take a good heart, and counterfeit to be a man.

ROSALIND So I do; but, i'faith, I should have been a woman by right. (AYLI 4.3.167-177)

“counterfeit”という動詞には、「(貨幣)を模造する」という意味と「～を(本当のような)ふりをする, 装う, ～に見せかける」の両方の意味が重なり, 3幕2場の“fancy-monger”の「恋の偽金造り」という意味と関連して fancy における変装や見せかけの要素を表している。オリヴァーはロザリンドが演技ではなく, 真実の激しい気持ち (passion) により顔が青ざめていると指摘し, 男の役を演じるように言う。この台詞において, fancy と passion の関連が示される。

怪我をしたオーランドを心配するロザリンドに対し, オーランドは視覚的恋について述べている。これまでオーランドに対して“you”で呼びかけていたロザリンドであるが, オーランドを心配して心の距離が近づいたため, 親密さを表す“thy”を用いている。

ROSALIND I thought thy heart had been wounded with the claws of a lion.

ORLANDO Wounded it is, but with the eyes of a lady.

ROSALIND Did your brother tell you how I counterfeited to Swoon when he showed me your handkerchief?

ORLANDO Ay, and greater wonders than that.

ROSALIND O, I know where you are. Nay, 'tis true. There was never anything so sudden but the fight of two rams, and Caesar's thrasonical

brag of 'I came, saw, and overcame', for your brother and my sister met but they looked; no sooner looked but they loved; no sooner loved but they sighed; no sooner knew the reason but they sought the remedy; and in these degrees have they made a pair of stairs to marriage, which they will climb incontinent, or else be incontinent before marriage. They are in the very wrath of love, and they will together. Clubs cannot part them. (AYLI 5.2.22-39)

オーランドは自分の心臓がロザリンドのまなざしによって傷を受けていると述べ, 視覚的な恋を強調している。先ほどは女性的な感傷を見せたにもかかわらず, ロザリンドは男装のギャニミードとして“you”という呼びかけに戻り, オーランドの血が付いたハンカチを見せられた時に, 自分が気絶の芝居をしたと言う。オーランドの“greater wonders”というフレーズは fancy における驚きを示し, ロザリンドの変装に気づいた可能性もある<sup>48</sup>。観客はロザリンドが男装していることを知っているのだから, この台詞は観客に対する隠喩的な暗黙の了解を示しているのだろう。これに対し, 直接的な意味で解釈したロザリンドはオリヴァーとシーリアの一目ぼれの話の指していると解釈し, 視覚から始まる恋について述べている。ロザリンドはこの台詞において段階的な比喩の修辭的手法について述べている<sup>49</sup>。ルネサンス期に錬金術が流行し, 結婚のイメージが用いられていることから, 錬金術におけるプロセスの段階が進んで結婚という男女の合一, つまり, 対立の統合に至ることを隠喩的に述べていると解釈できる。対立の統合は fancy の特徴であり, 段階的な比喩の修辭的手法は詩の創作のプロセスと関連する。オーランドは“I can live no longer by thinking” (AYLI 5.2.48) と述べているが, この“thinking”は fancy と対比される imagination の働きを表している。福田恆存も「想像」と訳し, 思考や理性を imagination と

<sup>48</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 210.

<sup>49</sup> *Ibid.*, 211.

関連させているようである<sup>50</sup>。

これに対し、ロザリンドは「もう無駄なおしゃべりをしてあなたを悩ませるのはやめましょう」と言いつつも、「だがこれだけは聞いてください」と言って、長々とした台詞を述べる。

…Believe then, if you please, that I can do strange things. I have since I was three year old conversed with a magician, most profound in his art, and yet not damnable. If you do love Rosalind so near the heart as your gesture cries it out, when your brother marries Aliena shall you marry her. I know into what straits of fortune she is driven, and it is not impossible to me, if it appear not inconvenient to you, to set her before your eyes tomorrow, human as she is, and without any danger.

(AYLI 5.2.56-65)

ロザリンドは魔術師の教えを受けたため自分には不思議な力が備わっていると言う。“not damnable”という表現は「黒魔術を行っていない、つまり、悪魔と交わりがない」という意味である。これに対し、ロッジのロザリンドはネクロマンサーと関わっていたという点で異なっている<sup>51</sup>。このように『お気に召すまま』においては、ロザリンドは黒魔術ではなく白魔術を行使する。黒魔術は悪魔と関わり禁止されていたのに対し、白魔術はよいことを行うための魔法である。だが、fancyは対立を統合するので錬金術とかかわる。次にロザリンドは自分のことを魔術師 (magician) であると言う。

By my life, I do, which I tender dearly, though I say I am a magician. Therefore put you in your best array, bid your friends: for if you will be

married tomorrow, you shall; and to Rosalind if you will. (AYLI 5.2.67-70)

G. ジェニングズは「魔術師の名称」について次のように述べている。「もっともよく聞かれるのは単なる『マジシャン』 magician である [本書では魔術師と訳す]。これはずっと昔から、どんな種類のマジックにせよ、それをやる人を全部ひっくるめていうことばであった。この意味ではほかに conjurer…などの呼び名もある…。ウィザード wizard という語は、もとはただ『賢い人』 wise man を意味した。だがやがて書物の学問だけでなく魔術にも賢い人をさすようになった。…ソースラー sorcerer という語はこれと反対に、黒魔術の意味を多く含んでいる。…ウィッチ witch は悪魔に仕え、悪魔の力を借りて悪いことをするもので、男女の区別なしに用いられる。…ネクロマンサー necromancer も…死者をよみがえらせて、未来を予言させるか、または命令を実行させることができると考えられた…」<sup>52</sup>

ロザリンドは悪魔とかかわらずに未来を予言する magician であり、白魔術を行使する<sup>53</sup>。magician は魔術だけに限定されないので、錬金術と関連すると考えられる。『お気に召すまま』において、至る所に錬金術的イメージが見られる。錬金術は金を生み出す高尚な技術 (art) であり科学 (化学) と関連する。ジェニングズは魔術と錬金術の関連について次のように述べている。「占いつまり未来のできごとを予報する (と考えられた) 技術は、魔術の枝分かれの一つである。魔術から芽ばえたもう一つのひこばえは、錬金術 alchemy の実行である。これは空想的なウィザードの魔術と実際的な実験とが結合したものといえよう<sup>54</sup>。錬金術師の考え方はかなりこみいっており、明らかに不合理であった。しかし私たちは、彼らが宗教、魔術、科学の重なり合う境目、つ

<sup>50</sup> 福田恆存訳『お気に召すまま』(新潮文庫, 1993年), 128.

<sup>51</sup> William Shakespeare, *As You Like It*, Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 212.

<sup>52</sup> G. ジェニングズ著, 市場恭男訳『エピソード魔法の歴史—黒魔術と白魔術』(教養文庫, 1987年), 41-42.

<sup>53</sup> William Shakespeare, *As You Like It*, Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 4.

<sup>54</sup> ジェニングズ, 43-44.

まりどの領域ともきめられない一種の無人地帯で仕事をしてきたことを思い起こさなければならない。彼らが荒唐無稽な魔術的なものばかりを相手にして研究しなければならなかったことを思い合わせるならば、彼らの考え方がかなり混乱してしまったことは不思議ではない。」<sup>55</sup>

このような錬金術の不合理性は fancy に通じるものがある。また、澤井繁男は次のように述べている。「とりわけ錬金術は、地上の自然物の中で特に金属を研究しようとする魔術であるが、その原理は魔術の知の原理と共通したものを持っている。…錬金術は意味ある自然、価値ある自然を相手として、“生ける自然”に人間と同じような生死、成長、徳性（力）を求めようとして擬人化を行い、かつ人間の自己実現（ユング）も意図していた。」<sup>56</sup>

空想（fancy/fantasy）は修辞や語句の反復と関連するが、魔術や錬金術における呪文にも語句の反復が見られる。5幕2場でフィービーがシルヴィアスに「恋とは何かを教えてあげなさい」（“Good shepherd, tell this youth what ‘tis to love.” [AYLI 5.2.78]）と述べるが、これに対するシルヴィアスの返答に“fantasy”という語が使用され、語句の反復が特徴的である。

It is to be all made of fancy,  
All made of passion, and all made of wishes,  
All adoration, duty, and observance,  
All humbleness, all patience and impatience,  
All purity, all trial, all obedience,  
And so am I for Phoebe. (AYLI 5.2.89-94)

この台詞において“fantasy”という語は恋と空想が関連することを示す。恋（fancy）は passion によって他者に服従するという受動性・他者性と関連する。ホプキンは空想概念において“passion”という語をキリストの受難と結びつけ、

自己滅却と他者（客体）への没入を fancy と関連させた。オーランドがまだ自己愛や imagination にとらわれているのに対し、シルヴィアスは fancy の作用によってフィービーに服従している。また、対立概念である“patience”と“impatience”の並置は、錬金術的な対立の統合を表している。さらに、空想について語る際には語句や音の反復があり修辞が強調されている。

『お気に召すまま』において錬金術のイメージが多々見られ、対立が統合することにより金となる。つまり、偽の愛が真の愛となり、錬術的結婚や錬金術師としてのロザリンドのイメージが描写されている。領地を追われた前公爵はオーランドにギャニミードが“Dost thou believe, Orlando, that the boy /Can do all this that he hath promised? (AYLI 5.4.1-2) と尋ねる。これに対しオーランドは、“I sometimes do believe, and sometimes do not, / As those that fear they hope, and know they fear.” (AYLI 5.4.3-4) と答える。<sup>57</sup>ここでは男装のロザリンドが持つ魔術的な力について述べている。これは空想を現実にする力であり、“believe”は空想を信じることにより現実に変化することを示唆している。だから理性的なオーランドは「希望がまだ実現していないことを恐れているのを意識しているが、まだ希望を持っている。」<sup>58</sup>この台詞は反対のことを述べている点で fancy の対立の統合を表している。つまり、オーランドはすでに森でロザリンドの fancy という魔法にかかってしまったのだ。

次に男装のロザリンドが登場し、前公爵、オーランド、フィービー、シルヴィアスにそれぞれ約束を確認し、場を仕切っている。まず、ロザリンドは自分がオーランドと結婚するという約束について述べている。

Patience once more, whiles our compact is urged.  
 (To the Duke) You say if I bring in your

<sup>55</sup> *Ibid.*, 103.

<sup>56</sup> 澤井繁男『魔術の復権—イタリア・ルネサンスの陰と陽』, 57-58.

<sup>57</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 217.

<sup>58</sup> *Ibid.*

Rosalind

You will bestow her on Orlando here?

(AYLI 5.4.5-7)

“compact is urged”については“agreement is affirmed and pressed forward; *compact* is accented on the second syllable”という注釈がある。<sup>59</sup> “compact”には「合意・協定・契約」という意味があるので、対立の統合を表す。この語は通常と異なり第2音節にアクセントがあることから強調されている、つまり、特別な比喩的意味を含んでいると考えられる。ロザリンドがエリザベス女王を表象しているとすれば、対立する二国間の合意を表す比喩言語でもあると解釈できるが、錬金術の意味も含んでいる。オックスフォード英英辞典によると、名詞で「冶金学」の意味があり、“a mass of powdered metal compacted together in preparation for sintering”と定義している。このように、「粉末の金属がろ過するためのガラス器で焼結させられる」というイメージは、錬金術における対立の統合を表している。この語は中英語の起源をもち、ラテン語で“closely put together, joined”という意味があり、“together”と“fasten”の意味を持っている。つまり、「しっかりと結びつける」ことを意味する。また、この台詞においてロザリンドは“if”で問いかけているので空想を表しているが、仮定法過去ではない“will”を用いて、空想が現実に近いことを意味する。以下の前公爵・オーランド・フィービーの台詞は詩的に対比されている。

DUKE SENIOR

That would I, had I kingdoms to give with her.

ROSALIND (to Orlando)

And you say you will have her when I bring her?

ORLANDO

That would I, were I of all kingdoms king.

ROSALIND (to Phebe)

You say you'll marry me if I be willing?

PHOEBE

That will I, should I die the hour after.

(AYLI 5.4.8-12)

ロザリンドは“will”で問いかけるが、オーランドに対して“if”ではなく“when”を用いているのは、空想がすでに現実になってきていることや彼と早く結婚したいという気持ちを表しているのだろう。フィービーも“will”を用いているので空想を現実にした気持ちが強いと思われるが、次に仮定法過去で述べ“die”という語を用いているが、これは後のシルヴィアスの台詞と対応している。また、結婚は生殖と関連するので生と死という対立の統合でもある。これに対し、男性二人の答えには“would”が用いられているので、理性的な男性は空想をまだ信じられない気持ちがあることがわかる。フィービーとシルヴィアスの結婚に関するロザリンドの台詞にも“if”と“will”が用いられ、仮定法現在で述べているので、空想が現実となり始めている。

ROSALIND

But if you do refuse to marry me

You'll give yourself to this most faithful  
shepherd?

PHOEBE So is the bargain.

ROSALIND (to Silvius)

You say that you'll have Phoebe if she will.

SILVIUS

Though to have her and death were both one  
thing. (AYLI 5.4.13-17)

ロザリンドは仮定法現在で強調の“do”を用いているので、現実には自分が女性であるためフィービーが自分と結婚しないと確信している。また羊飼いのシルヴィアスの性質である“faithful”は忠実や信頼を表し、後述するように、真の愛と関連する。また、“bargain”も“compact”と同義で

<sup>59</sup> Ibid.

あることはオックスフォード英英辞典の次の定義からわかる。“an agreement between two or more people or groups as to what each will do for the other.”このように、結婚と錬金術における対立の統合は fancy と関連すると考えられる。シルヴィアスに対するロザリンドの台詞は仮定法過去ではないので、これからフィービーがシルヴィアスと結婚したくなることを暗示している。これに対し、彼は「たとえフィービーと結婚することと死と、その二つが一つのことを意味するとしても結婚する」と述べているので、結婚が死と対比されている。これは錬金術のイメージにおいて一度死を経験することで復活し金に変化するという意味合いも含んでいると思われる。次にロザリンドは場をまとめて「私はこの問題を一度に丸く収めて見せると約束した」と述べている。

#### ROSALIND

I have promised to make all this matter even.

Keep you your word, O Duke, to give your daughter.

You yours, Orlando, to receive his daughter.

Keep your word, Phoebe, that you'll marry me,

Or else refusing me to wed this shepherd.

Keep your word, Silvius, that you'll marry her

If she refuse me; and from hence I go

To make these doubts all even.

(AYLI 5.4.18-25)

“promise”という動詞は、これから未来に向けて空想を実現するという意味を持ち、このロザリンドの台詞においても“will”が用いられている。“make all this matters even”という表現は「すべての障害を取り除く」という意味があり、ロザリンドの語りには魔術の呪文のような性質がある<sup>60</sup>。羊飼いは羊である信徒を導くキリストのイメージがあるので、羊飼いに扮したロザリンドは対立を統合するキリストの表象でもある。そして、前公

爵の台詞には冒頭のオーランドの台詞と同じく“remember”という動詞が用いられている。

#### DUKE SENIOR

I do remember in this shepherd boy

Some lively touches of my daughter's favour.

#### ORLANDO

My lord, the first time that I ever saw him,

Methought he was a brother to your daughter.

But, my good lord, this boy is forest-born,

And hath been tutored in the rudiments

Of many desperate studies by his uncle,

Whom he reports to be a great magician

Obscurèd in the circle of this forest.

(AYLI 5.4.18-34)

オーランドはギャニミードとしてのロザリンドを「優れた魔術師」と呼ぶが、「錬金術師」の意味合いも含意されている。“circle”は魔法や魔術師を連想させ、アーデンの森全体が魔法の場となる<sup>61</sup>。“Obscurèd”という過去分詞は「覆い隠された」という意味があり、同じく「隠す」という意味を持つ occult と同義である。つまり、ロザリンドが変装により実体を隠していることを示唆する。

フィービーはシルヴィアスに fancy と真の愛における faith が結びつくことを示している。“I will not eat my word, now thou are mine, / Thy faith my fancy to thee does combine.” (AYLI 5.4.147-148) この台詞には「君の忠誠が私の空想と結びついて君を愛させる」という意味がある。また、“combine”には化学的な意味があり、faith と fancy という異なる要素を結びつけ愛という新しい化合物を作るという化学的な意味があり<sup>62</sup>、錬金術的な対立の統合が示唆されている。このことからシェイクスピアの fancy は恋という意味だけではなく空想の働きと関連する。ルネサンス期において化学は錬金術から発展していったので、fancy の対立の統合は錬金術とも関連している<sup>63</sup>。

<sup>60</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 218.

<sup>61</sup> *Ibid.*

<sup>62</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. (London: The Arden Shakespeare, 2020), 341.

ロザリンドの男装の目的は「襲われることなく旅をする」ことであるが、この点について岡村俊明は、捜し求め、また求められているオーランドに森で会っても男装のままである理由について「男装という仮面をつけてこそ、通常では言えないことを言うことができる」と述べ、4幕1場のロザリンドの台詞を引用している<sup>64</sup>。

Come, woo me, woo me, for now I am in a  
holiday humour, and like enough to consent.  
What would you say to me now an I were your  
very, very, Rosalind? (AYLI 4.1.62-65)

ロザリンドはオーランドを教育したり女性であるふりをしたりする点で、シェイクスピアの作品における他の男装のヒロインと異なり、男性として話し行動する自由がある<sup>65</sup>。ロザリンドの台詞には語句や音の反復・仮定法過去が見られ、fancyの要素と関連している。“humour”は「気分」を表すと同時に、英国ルネサンス期においては「体液」を表す語であった。人の気質は体の中にある4つの体液の割合によって支配されると考えられた。つまり、血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁であり、これらに対応する気質は活気、無気力、短気、憂鬱である<sup>66</sup>。ジェイクイズは一見憂鬱であるが、fancyの修辞とも関連する特殊な気質を持つと考えられる。“holiday”は日常の仕事や義務から解放され祝祭的気分になる日であり、遊戯性と関連し、山口昌男が『道化の民俗学』で述べる道化によるカーニヴァル化や逆転を引き起こす誘因である。森は“holiday humour”，カーニヴァル、祭りの愚かさや喜びの場を提供する<sup>67</sup>。祝祭日には変装や遊戯が許されるのはfancyの働きであり、ロザリ

ンドは道化とともにfancyによって逆転を引き起こす。変装により通常では言えないことをいうことが可能になるとするのは非日常であり、森は非日常性と関連している。

『お気に召すまま』は4組の男女の結婚で終わるが、最後に結婚の神ハイメンが登場し、ロザリンドのエピローグで締めくくられる点について考えてみたい。この劇でfancyの表象としてのロザリンドは神的存在として描写されているがゆえに、最終的には結婚の神が男女という対立を統合するのであるが、神がfancyの動作主としてロザリンドをヒロインにしたと捉えることができるのではないだろうか。ここで述べる神はキリスト教的な神ではなくギリシャ神話の神である。シェイクスピアの時代においては、錬金術においても対立の統合の表象として男女の合一の図像が用いられていることから、特にシェイクスピアの男装のヒロインが登場する喜劇において、男女の結婚で終わることによりfancyの対立の統合を強調していると考えられる。ロザリンドはエピローグで男女の愛について述べている。

…I am not furnished like a beggar,  
therefore to beg will not become me. My way is  
to conjure you; and I'll begin with the women. I  
charge you, O women, for the love you bear to  
men, to like as much of this play as please you.  
And I charge you, O men, for the love you bear to  
women—as I perceive by your simpering none of  
you hates them—that between you and the  
women the play may please. If I were a woman I  
would kiss as many of you as had beards that  
pleased me, complexions that liked me, and

<sup>63</sup> ジェニングズ, 98. 「錬金術という『科学』の名(アルケミー alchemy)は、後になって生まれたもっと真正な科学つまり化学の名(ケミストリー chemistry)と同じく、単に『注ぐ』を意味するギリシャ語からきている。[錬金術および化学の語源になっている chem という語は、エジプト語で『黒い土』を意味する khem または『铸造』を意味する chyma からきているという説もある。] …記録に残っている最初の錬金術師は女性だった。」

<sup>64</sup> 岡村俊明『シェイクスピアを読む』(朝日出版社, 1991年), 144-145.

<sup>65</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 36.

<sup>66</sup> ジェニングズ, 110.

<sup>67</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 33.



breaths that I defied not. (*AYLI*, Epilogue, 9-19)

ロザリンドは“beggar”と“beg”の頭韻を用いて、自分が乞食ではなく「新婦のドレスを着ている」ことをほのめかす。この台詞において“furnished”には「着飾る。ロザリンドが結婚式のためのドレスを着ている」<sup>68</sup>という意味が含意されている。これまで男装していたロザリンドはエピローグにおいても非日常的な結婚という特別な祝祭のためのドレスで自分を装飾している。ロザリンドは女性に戻るが、最後まで fancy の非日常性や祝祭における装飾・変装を身に纏い、「魔法をかける」(conjure) と述べている。この動詞の表層の意味は“please”と同義の「嘆願する」であり、「(a) 真面目にお願いする (b) (申し立てられた [alleged] ギャニミードの魔力を指して) 相手に魔法をかける」<sup>69</sup> という二つの意味がある。“alleged”は「証拠なしに違法の性質を持つことについて述べている」(*Oxford Dictionary of English, Second Edition Revised*)。魔術は当時違法であり、錬金術も正式には違法であった。魔女は森に住み薬草を調合して人々を癒すと思われていたので、ロザリンドを魔女あるいは魔術師として見ることもできる。錬金術師もまた人里離れた場所で実験を行っていたので、ロザリンドを錬金術師として見ると森の小屋は錬金術の実験室と考えられる。但し、ルネサンス期において魔女は迫害されていたので、ロザリンドをあからさまに魔女として描写することは危険なため、錬金術的な要素が多く見られるが、アウトサイダーとしてのロザリンドは道化と同様に上下を転覆させる破壊的な側面を秘めている。

エリザベス1世は錬金術に関心があったため、この劇は女王の「お気に召すように」錬金術的イメージをちりばめているのかもしれない。男装して男性を操るロザリンドは、純潔の女神ディアナのように未婚であり、政治的に男性の役割を果たさねばならなかったエリザベス女王自身を表象し

ている可能性がある。錬金術の初期段階において戦いの図像が見られる。この戦いは諸外国との闘いも意味し、協定に関する語は対立の統合を表している。エリザベス1世は男性の干渉を受けずにイギリスを支配しようとし、男性のダブレットを着た。ロザリンドもダブレットを着ているので、シェイクスピアは女王の表象として男装のヒロインを生み出したと考えられる。だからエリザベス1世在位時代にシェイクスピアが男装のヒロインが登場する劇を続けて創作したのかもしれない<sup>70</sup>。このように考えると、当時魔女狩りなどで魔女にはネガティブなイメージがあったため、ロザリンドを魔女として見るよりも、錬金術的イメージと関連すると考える方がよいだろう。エリザベス女王も錬金術は擁護したが魔術には否定的であり、1562年に「魔法禁止令」を制定した。この場合の魔法は黒魔術を指し、魔法により殺人を犯した場合は死刑に処することを定めている。また、ジェームズ1世は1597年に『悪魔学』という本を執筆し、魔法を行うものを起訴するように指示した。このように、黒魔術は禁止されたが、ロザリンドは白魔術や錬金術を行うので、『お気に召すまま』のヒロインとして容認されたのだろう。

ロザリンドの魔力は、最終的に男女という対立物を統合する“the power of fancy”である。だからエピローグにおいてロザリンドは女性と男性に別々に呼びかけ、最後に男女を統合している。“I'll begin with the women”という台詞は、この劇の冒頭ではロザリンドが女性の服装を身にまとっていたことを想起させる。また、まず高貴な女性を優先するレディーファーストが中世以来の宮廷における習わしであり、この劇が宮廷で上演されるのを想定して、最初に女王に向かって呼びかけたと考えられる。女性への呼びかけにおいて、“love”と“like”, “please”という語が関連し、男性への愛とこの劇に対する愛が対比されている。ゆえに、

<sup>68</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 227.

<sup>69</sup> *Ibid.*

<sup>70</sup> エリザベス1世とロザリンドの関連については, William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. (London: The Arden Shakespeare, 2020), 5-6. も参照.

タイトルの“like”は“please”と同義であり、冒頭の名詞“pleasure”の意味も含意しているだろう。fancyは恋を表すので性的なニュアンスを含んでいる。次に男性に対しても同様に呼びかけているが、“between you and the women the play may please”という表現において男女の合一が含意されている。“the play”には「(a) *As You Like It* (b) (タイトルと一致する) 愛の行為」<sup>71</sup>という二つの意味があり、多義性や性的なニュアンスが含意されている。ロザリンドはタッチストーンと同じく“If”を用いて仮定法過去で「もし私が女だったら」と述べている。ここでロザリンドは花嫁の衣装を着て、これからオランダと結婚するのに非現実性を表す仮定法過去を用いるは、当時女性の役を少年俳優が演じていたからである<sup>72</sup>。観客は少年がロザリンドを演じているとわかっているのに、女役を演じる少年俳優自体が両性具有的であり、劇の最後までロザリンドは本当の女性にはならずfancyの力を行使している。

大場健治は、シェイクスピアが『お気に召すまま』を創作したエリザベス朝における錬金術への関心の高さについて述べている。「エリザベス女王自身錬金術の可能性を信じ実験の費用を出資していた…自然界の安定と調和は完全体の黄金によって維持される、ちょうど人間界の安定と調和が理想的主君によって維持されるように。エリザベス女王と錬金術とのつながりもこの点から理解されなくてはならない。つまりはそういう対応の中世的原理のもと、金属界の階層にしたがって、完全なエリキサを求めようとする錬金術の営みは、呪術的、魔術的側面を伴いながら、なおかつ神学と科学とを統合しようとする緊張した『学問』でありえたわけだ。この時代の錬金術師にはどのような人物がいたか。たとえば16世紀の末に活躍したエドワード・ケリー。この錬金術師が、当時数学者、天文学者として令名高かったジョン・ディー博士（彼もまたオカルト学における当代最

高の知識人として最近とみに脚光を浴びつつある）にとり入り、彼の助手役となって、錬金の秘法を看板にヨーロッパ諸国の宮廷を歴訪したという事実がある。1580年代のことであった。…二人の強烈な存在感は、世紀が変わってもなお人びとの記憶から消えることがなかったであろう。」<sup>73</sup>

エリザベス1世自身錬金術に関心があり、有名な錬金術師や魔術師が活躍した時期に『お気に召すまま』が創作・上演されたので、ロザリンドに錬金術師や魔術師のイメージが含まれていても問題ないし、むしろ、女王や上流階級の知識人たちはロザリンドに隠された比喩的な意味を見つけて楽しんでいたのかもしれない。中世以来、王侯貴族や知識人しか文学におけるアレゴリーや隠喩に隠された意味を理解することができなかったので、絵画や演劇においては、視覚や演技によって庶民も隠れた意味をほのめかされることにより、ある程度理解できたのだろう。この点において、演劇というのは読む文学作品と異なり視覚や音を重視している。音楽や歌もエンターテイメントとしての演劇においては重要であるため、ロザリンドは喜劇におけるfancyの要素を凝縮した存在であると同時に、錬金術や魔術のイメージも喚起している。「魔術師伯爵」として知られていたノーサンバランド伯爵は、哲学・錬金術・科学の実験に関心があった<sup>74</sup>。

男装のロザリンドがどのように錬金術のイメージと関連しているか考えてみたい。ロザリンドは普通の女性とは違い、知性と変装により自分に恋する男性を視覚的に欺き操る両性具有的な存在である。錬金術の実験の最高の段階において、対立の統合の表象として男女の合一である結婚のイメージが用いられている。以下の図像を参照すると、『お気に召すまま』における男装のロザリンドと結婚に錬金術的な意味が隠されているということがわかる。この図版はジョージ・リプリーが生きていた時代のものであるが、彼の「幻想」や

<sup>71</sup> *Ibid.*, 228.

<sup>72</sup> *Ibid.*

<sup>73</sup> ベン・ジョンソン著、大場健治訳『錬金術師』（国書刊行会、1991年）、252-254。引用部分は大場の解説である。

<sup>74</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 29.

フィラテスの註解にきわめて正確に符合している。(Fig. 10)<sup>75</sup> 幻想は空想と同義であるため、この図は空想における対立の統合を表している。

Fig. 8 において、右上、右下、左下の図像は、男=太陽と女=月の合体である結婚を表し<sup>76</sup>、右上の図像のように、太陽と月は王と女王としても表象されている。錬金術の最終段階における結婚の表象は卑金属から貴金属への変質を表している。この変質を『お気に召すまま』に当てはめてみると、fancyの「気まぐれな恋」が「真の愛」へと変化したことと重なる。森でfancyをオーランドに与えたロザリンドは、最後に現実世界に戻って結婚と真の愛を得るのである。前述のように、月が女性的なfancyの表象であるなら、太陽は男性的imaginationを表象することから、太陽と月の合体=結婚は創造の最終段階とも関連する。錬金術を心理学に応用したユングはこれを意識と無意識の統合の表象としたが、これによるとfancyは特に無意識と関連していると考えられる。コールリッジは空想が観念連合の法則や連想と関連していると定義したが、ユングも無意識を証明するために言語連想実験を行い空想について研究した<sup>77</sup>。そして、空想を生み出す過程が錬金術の

実験の図像と重なるのである。言語の連想は比喻やメタファーにおける意味の多義性を生み出す過



Fig. 10

<sup>75</sup> 錬金術の図像については、スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著、種村季弘訳『錬金術—精神変容の秘術』（平凡社、1990年）に掲載された図像を使用する。この図版の注釈についてはp.95を参照。

<sup>76</sup> *Ibid.*, 98. 「この連続画には重要な錬金術的モチーフがくり返し描かれている。とりわけ神秘的な結婚、死と復活、対立物の統一、誕生と昇級などである。獅子と太陽、使者の杖（カドゥケウス）を持ったメルクリウス、王と王妃、寵のなかの竜（ドラゴン）、隠された火の矢、鷲、両性具有者（アンドロギュノス）、三界を象徴する三頭の蛇、といったような象徴もここにはいやというほど見られる。…\* J・D・ミューリウス『改革された哲学』、1622年、ロンドン大英博物館蔵（印刷本）」

<sup>77</sup> 林道義『ユング』（清水書院、2007年）、158。林は錬金術における対立の統合について、王と女王、王と聖職者の合体、太陽と月の合体であるヘルマフロディテ（ヘルマフロディトス）の図像を用い、ユング心理学における空想の重視について述べている。「夢とは意識と無意識の複雑な絡まり合いの中から生まれてくるものであり、その中には、その人の無意識の特徴が現れているはずであるから、我々が自分の知らない心の働きを知る上で非常に貴重なものだということになるであろう。…無意識というものも我々の心の中であって現実存在し、いろいろな働きをしているのだというわけである。そうすると、その現れである夢も極めて現実的なものだといえるわけである。…ユングの時代のヨーロッパでも、特に学会では合理主義が強かったので、ユングもその要求の圧力を人一倍感じていたに違いない。彼はついに無意識の存在を科学的に証明する、すばらしい独創的な方法を考え出した。それが有名な言語連想実験といわれるものである。」(*Ibid.* 13-15)；「ユングに言わせると、錬金術師たちは、化学的な実験を行っているときに、本気で金を作り出そうとしていたのではなく、じつはある種の心的体験をしていたのであり、彼らには本物の金を作り出すより、その心的体験のほうが大切だったのである。…つまり、物質を混ぜ合わせたり、溶解させたりする中で現れてくる色や形やプロセスに、自分の内面的な体験を投影しながら、その作業を通じて次第に高い境地に至るのを理想としていたというわけである。そして金とはその心理的宗教的な最高の状態を表すシンボルに過ぎなかった。…ユングの見方によれば、錬金術師たちはその作業の間を通じて、無意識の奥深い内容を見つめ、それと交流し、対決していたのである。それはまさに無意識内容の投影体験であった。」(*Ibid.* 155-156)

程でもあるからだ。

Fig. 6の錬金術の図像でも男女の合一=結婚が表象され羽が生えているが<sup>78</sup>、これはゼウスとしての鷲にしがみついて飛翔するガニュメデスの図像と空想の図像が翼と関連していることに結び付く。また、錬金術の図像に鷲もよく見られる。Fig. 6において男女の合一としての結婚はヘルマフロディトス（ヘルマフロディテ）という両性具有的存在によって表象されている。ヘルマフロディトスにおいて男性原理と女性原理が一体となっている<sup>79</sup>。この図においてヘルマフロディトスが翼をもつことから、ガニュメデスや空想の図像とも関連しているので、男装したロザリンド=ギャニミードは錬金術の図像にみられるヘルマフロディトスの働きをしていると考えられる。つまり、ロザリンドは対立の統合である男女の合一=結婚の表象でもある。Fig. 11と12（10, 13, 14, 17）は男女および太陽と月が合体したヘルマフロディトスの図像である。また、Fig. 13の錬金術の図像では両性具有者ととも鷲が描かれているので、ガニュメデスの図像とさらに関連している<sup>80</sup>。鷲の錬金術的イメージについて、オグルヴィは「…錬金術ではしばしば、この「魂」と「精気」の争いが抜き身の剣をもつ男と、鷲を持つ女で象徴されている…太陽と月の結婚により両性具有の子が生まれる」と述べている<sup>81</sup>。シェイクスピアの喜劇においては必ず結婚において愛が完全なものとなり<sup>82</sup>、『お気に召すまま』でロザリンドは最後に魔法の力について述べて、結婚式のまとめ役となっている。結婚は錬金術において対立の統

合の完全な形を表す宗教的な儀式である。ルネサンス期において錬金術と魔術は関連していたので、結婚式は魔術の儀式も意味しているのかもしれない。『お気に召すまま』を錬金術の図像に当てはめてみると、男女の合一=結婚が錬金術の最終段階であるが、ヘルマフロディトスとしてのロザリンドは最後にオーランドと結婚することにより自己実現を果たすと考えられる。つまり、卑金属=アウトサイダーであったロザリンドは最後に金=花嫁に変化するのである。当時の女性観では女性は結婚により完成すると考えられていた。

澤井繁男は錬金術思想に決定的な影響を与えたヘルメス思想の基本を述べた文である『エメラルド版』について項目1から10まで解説している。その内、3では「太陽はその父にして、月はその母、風はそを己が体内に宿し、大地はその乳母にして、万象の意志はそこにあり。」と書かれているので、



Fig. 11

<sup>78</sup> Fig. 6「ヘルマフロディトスが完全性の王冠を頭上に戴いている。すなわち固体と気体が永遠に結合されているわけである。」スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著、種村季弘訳『錬金術—精神変容の秘術』, 39.

<sup>79</sup> 「これは心理学的に見れば、『黒化』における現世的な世界や闇の世界の体験と、『白化』における霊的な再生との体験とが結合して、第三の新しい、より高い境地が実現したことを意味している。したがってこれがユングの『自己』の状態にあたることは明らかであろう。」(林道義『ユング』, 158-159)

<sup>80</sup> Fig. 13「両性具有者（アンドロギュノス）は対立物の統一の化身であり、東洋思想においても西洋思想においても同じく、エロティックな表現を通じて象徴される一個の宇宙的原理である。鳥は、概して青い鷲であるが、錬金術師たちにとっては作業のなかで起こる継続的気化もしくは昇華を表している。図の場合には、両性具有者（アンドロギュノス）を抱えて飛翔する鷲と両性具有者（アンドロギュノス）の足下の死んでいる鳥の群れとが、それぞれ、固体の気化と気体の固体化を意味している。」スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著、種村季弘訳『錬金術—精神変容の秘術』, 22.

<sup>81</sup> ガイ・オグルヴィ著、藤岡啓介訳『錬金術—秘密の「知」の実験室』, 12.

<sup>82</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 16.



Fig. 12



Fig. 13

錬金術の図像においても太陽が男性、月が女性として表象されている。ゆえに、fancy は月と関連しているが、ロザリンドも月の女神ディアナ（アルテミス）と関連している。ディアナは狩猟の女神でもあるので、森と関連し、男性的な側面がロザリンドの男装として表されている。

スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラは Fig. 14 の図像について次のように述べている。「月の女神はこの図では「通常の」銀ではない。月神の角と矢は隠された火に関係がある。「裸のディアナ」は黒化（ニグレド）を洗浄する水である。メルクリウスはあるとき、二匹の争い合っている蛇めがけてその杖を投げつけた。すると二匹の蛇は杖に巻きついて、メルクリウスの標章（エンブ

レーム）、すなわち対立物の調和的結合の象徴であるカドゥケウスを生み出した。」<sup>83</sup> また、この図像は「いわゆる『結婚』《Nozze》と称される写本からのもの」である<sup>84</sup>。このような描写から、『お気に召すまま』において錬金術的な要素が見られ、対立物を統合する fancy の表象であるロザリンドが月の女神や結婚と関連していると考えられる。

『お気に召すまま』ではディアナについての言及も見られる。3幕2場でオーランドはロザリンドをディアナに譬えている。

And thou thrice-crownèd queen of night,  
survey  
With thy chaste eye, from thy pale sphere above,  
Thy huntress' name that my full life doth sway.  
O Rosalind, these trees shall be my books,  
And in their barks my thoughts I'll character  
That every eye which in this forest looks  
Shall see thy virtue witnessed everywhere.  
Run, run, Orlando; carve on every tree  
The fair, the chaste, and unexpressive she.  
(AYLI 3.2.1-10)

ロザリンドとシーリアはオーランドについて次のように述べている。

ROSALIND Never talk to me. I will weep.  
CELIA Do, I prithee, but yet have the grace to  
consider that tears do not become a man.  
ROSALIND But have I cause to weep?  
CELIA As good cause as one would desire;  
therefore weep.  
ROSALIND His very hair is of the dissembling  
colour.  
CELIA Something browner than Judas's.  
Marry, his kisses are Judas's own children.  
...

<sup>83</sup> スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著、種村季弘訳『錬金術—精神変容の秘術』、46。

<sup>84</sup> *Ibid.* 42.



Fig. 14

ROSALIND And his kissing is as full of sanctity as the touch of holy bread.

CELIA He hath bought a pair of cast lips of Diana. A nun of winter's sisterhood kisses not more religiously. The very ice of chastity is in them. (AYLI 3.4.1-16)

このロザリンドとシーリアの台詞は音の反復により対応するとともに、キリスト教的イメージとギリシャ神話のイメージの統合が見られる。また、男性であるオーランドが月の女神ディアナに譬えられている点で、両性具有的な描写となっている。Fig. 13において「両性具有者（アンドロギュノス）は対立物の統一の化身であり、エロティックな表

現を通じて象徴される」。この台詞において、性的な描写がキリスト教の聖餐や純潔の女神という反対要素と結びついている点で、対立の統合を表している。聖餐はキリストの受難（passion）を表し、客体に没入する行為である。受難は殉教者の法悦の彫像や絵画において性的にも解釈できる表現を伴っているので、客体に没入することにより死を通して法悦に至るという両極の統合を表している。「kissing」という表現については「kiss」でも良いはずだが、より生々しい官能的な表現を選んで聖餐と結びつける点において、伝統的な受難の表現を踏襲している。「cast」には「(a) 捨てられた (b) (純潔の女神ディアナの像のために) 铸造された、型に入れて造られた」<sup>85</sup>の二つの意味が混在しているので、fancyの働きをする過去分詞である。前述の“fancy-monger”や“counterfeited”の「偽金造り」「模造」という意味と関連し、fancyが「偽、真似る、作り出す」という行為であることを示している。つまり、錬金術のアレゴリーは自然を模倣し金を作り出す作業や対立の統合を表しているので、これらの比喻においてfancyと錬金術のアナロジーが含意されている。

シーリアの台詞において、オーランドの唇は「純潔の女神ディアナの彫像の冷たい唇」や「冬のよう冷たい厳格な修道女」に譬えられている。これらの女性を表すメタファーを男性に適用する点において、オーランドはロザリンドの両性具有と結びつき、両者の対応・統合を示している。ユングは錬金術が「『対立しあうものの結合』を目指していること、そこに登場する物質と物質の変化のすべてはほとんど心の変容のプロセスのアレゴリーであること、また、そこにはたいてい『アニマとアニムスの対比と統合』が暗示されている」<sup>86</sup>と考えた。この考えをシーリアの台詞に当てはめると、アニマは女性でアニムスは男性なので、ロザリンドとオーランドが対比され、二人ともディアナの性質を持つがゆえに、詩語において二人が統合されていると考えられる。このように、

<sup>85</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 179.

<sup>86</sup> <https://1000ya.isis.ne.jp/0830.html>

一見散文と思われる平易な語句を用いながら深層の意味を隠している詩語がシェイクスピアの *fancy* の特徴である。平易な語を用いながらも深層の意味を持つ詩語により、シェイクスピアの言葉は現在も色あせない魅力を持つのだろう。また、次のロザリンドの台詞も *fancy* と関連している。

…I will be *more jealous of*  
 thee than a Barbary cock-pigeon over his hen,  
 more clamorous than a parrot against rain, more  
new-fangled than an ape, more giddy in my  
desires than a monkey. I will weep for nothing,  
like Diana in the fountain, and I will do that when  
 you are disposed to be merry. I will laugh like a  
hyena, and that when thou art inclined to sleep  
 (AYLI 4.1.136-143)

“new-fangled” という語はハイフンを用いたシェイクスピアの造語と思われる。過去分詞 “fangled” の起源は古ノルド語の “fang” に由来し「捕らえる、つかむ」の意味で使用されるので、この造語は「新しいものに容易にとらわれる」と解釈できる<sup>87</sup>。このようなハイフンを用いた詩語はシェイクスピアの作品に特徴的で独創的である。“giddy” には「浅はかな、浮ついた、移り気、気まぐれ」という意味があり<sup>88</sup>，“desires” とともに *fancy* の特性を表している。また、猿は人間の真似ができるので「偽」である *fancy* と関連する。西洋の伝統的な象徴として、猿には「肉欲、異端、悪徳、虚栄、貪欲、怠惰、物まね」を表す負のイメージがあるが、人間を模倣する生き物とされ、中世以降は自然を模倣する芸術と結びついて絵画や彫刻のシンボルにもなった。このように、ロザリンドは「猿よりも欲望において気まぐれ」であると述べ、性的な意味において *fancy* と関連している。「噴水のディアナの像」の描写については、錬金術の図

像において「裸のディアナ」は黒化（ニグレド）を洗浄する水であるため水と関連する。「噴水」と「涙」は比喻によって結び付くので「ディアナの唇の冷たさ」とも関連し、ディアナは「狩猟・結婚・出産の女神として」描写されている<sup>89</sup>。このようにディアナには水・結婚・出産という錬金術のイメージがあるが、泉（fountain）は伝統的に純潔・永遠の命・再生を表している。また、この台詞は「夫が悲しい（楽しい）とき妻は楽しい（悲しい）」ということわざに由来するが<sup>90</sup>、対立概念が対比されている。ハイエナの鳴き声は笑い声に類似している。つまり、ロザリンド自身がハイエナであり、「眠りたい気分」で彼女の変装に気づいていないオーランドをここで笑っている<sup>91</sup>。*fancy* の表象である男装のロザリンドは錬金術師やディアナと関連し、優位に立ってオーランドを操っているのである。

『お気に召すまま』において、最終的に結婚が錬金術における対立の統合の象徴であるが、最初は対立が描写され、フレデリック公爵は兄の領地を篡奪し、オーランドとチャールズのレスリングも対立を象徴している。錬金術の図像においても、はじめは対立物が試験管の中で争っているが、最終的に結婚に至り統合される。また、フレデリックも改心し、兄に領土を返還する。その対立の統合に必要なのが *fancy* の力であり、最後にロザリンド、タッチストーン、結婚の神ハイメンが *fancy* により対立を統合する。ロザリンドは最終的に男装を解いて女性の姿になるが、婚礼の衣装になるので最後まで普通の女性には戻らないため、完全に覆いをとったわけではない。だからロザリンドはエピソードにおいても魔術師・錬金術師として “conjure” という動詞を用いているのだろう。

<sup>87</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 193.

<sup>88</sup> *Ibid.*

<sup>89</sup> *Ibid.*

<sup>90</sup> *Ibid.*

<sup>91</sup> *Ibid.*



## 道化タッチストーンと fancy・修辞・錬金術

男装のロザリンドと行動を共にするのが道化のタッチストーンであるが、道化もまた fancy の働きにおいて重要な役目を果たしている。道化も変装を身にまとい、シェイクスピアの作品の劇中劇において演技的要素を強め、祝祭において立場を逆転させる fancy を体現している。道化は狂気を演じ、fancy を駆使して言葉を操り、劇を外から眺めて操っているシェイクスピア自身を表すことさえある。道化は男性ではあるが対立の統合の動作主として両性具有的な存在である点で、ロザリンドと同様に言葉・修辞を駆使する。道化が知性を隠しているのに対し、賢い人が愚かなことをするという矛盾についてタッチストーンは述べる。 (“The more pity that fools may not speak wisely what wise men do foolishly.” [AYLI 1.2.85-86]) つまり、両義性を持つ fancy において嘘やまやかさが真実にもなり、阿保が賢く、賢者が愚かになるという矛盾や立場の逆転を孕んでいる。

タッチストーンは修辞を駆使し、フィービーに恋するシルヴィアスの愚かさと「自然」について述べている。

…We that are true lovers run  
into strange capers. But as all is mortal in nature,  
so is all nature in love mortal in folly.  
(AYLI 2.4.50-52)

“capers”には「ふざけて跳ね回ること、空想的な (fantastic) 状況、性行為」の意味があり、ラテン語で「ヤギ」を意味する“caper”と pun (語呂合わせ) になっている<sup>92</sup>。このように性的なニュアンスを含んだメタファーは fancy と関連し、1幕で述べられた fancy と pleasure の関連も想起する。また、“strange”も fancy の特徴を表す形容詞

である。オックスフォード版は“mortal”という形容詞について次のように述べている。“(a) abundant (b) bound to die. Touchstone is saying that just as nature is plenteous (but everything natural must die) so it is natural that everyone in love is abundant in folly.”<sup>93</sup>アーデン版ではこの台詞について、“Just as in the course of nature all will die, so are all natural creatures in love ready to die for their delusions”; an example of *chiasmus*, the rhetorical patterning of words in the shape of a cross (x) : *mortal, nature / nature, mortal*”<sup>94</sup>と注釈している。ケンブリッジ版では、“all that lives must die, so all those who love are bound to do foolish things.”<sup>95</sup>という注釈がある。このように、タッチストーンは散文的でありながらも多義的な比喩を用いて語る。

ここではシルヴィアスの一目ぼれについて述べているが、ロザリンドとタッチストーンの対話が続く。

ROSALIND Thou speak'st wiser than thou art  
ware of.  
TOUCHSTONE Nay, I shall ne'er be ware of  
mine own wit till I break my shins against it.  
ROSALIND  
Love, Love, this shepherd's passion  
Is much upon my fashion.  
TOUCHSTONE And mine, but it grows  
something stale with me. (AYLI 2.4.53-59)

ロザリンドはタッチストーンが無意識のうちに知的に語っていることを指摘している。これに対し、タッチストーンは自分の“wit”を自覚していないと述べている。コールリッジの定義によると wit は fancy と類似しているが、より低次の修辞である。タッチストーンは道化 (the fool) でありながら知性をほのめかす、つまり、fancy の対立の統合や修辞と関連する。オックスフォード版

<sup>92</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattanway (NY: Cambridge UP, 2009), 125.

<sup>93</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 136.

<sup>94</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre (London: The Arden Shakespeare, 2020), 206.

<sup>95</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattanway (NY: Cambridge UP, 2009), 125.

の解説によると、witはシェイクスピアの時代に宮廷人の間で流行し、主に性的な意味を含む pun (語呂合わせ)に見られるが、タッチストーンは修辞はそのような風潮を反映している。ゆえに、タッチストーンは修辞という点で fancy の表象であるロザリンドより低次のお供であり、ロザリンドと同様に対立を統合し上下を逆転させる。ここで、ロザリンドが“Jove”と呼びかけている点に注目したい。“Jove”とは“Jupiter”であり、ゼウスを指す。つまり、ゼウスである鷲につかまって飛ぶガニユメデスや空想を連想させる。ゆえに、fancy と passion の関連が示されるが、シェイクスピアが“upon my fashion”という表現を採用したのは、“passion”, “upon”, “fashion”において“on”の音を反復するためであろう。このようにロザリンドとタッチストーンは台詞およびこの劇全体においてリズムや音楽性が強調されている。ロザリンドもオーランドに恋をしているので passion の影響を受けるが、fancy を行使する彼女は常に彼より優位に立つ。つまり、恋する男性のように愚かにはならず自分を客観視できるのである。ロザリンドが表象する fancy は遊びの恋であり、男装して視覚によりオーランドをだますが、オーランドは彼女の fancy の“delusions”によって狂気に陥ってしまう。これは女性的他者としての fancy の影響による男性的主体の死を意味している。また人間が“mortal”であるのに対し、ロザリンドは“heavenly”と形容され神的存在として描写される。これはロザリンドの fancy が神に由来するものであることを意味し、死ぬ運命にある人間と対比されている。

騎士オリヴァー・マーテキストは、タッチストーンのことを次のように述べている。(“Ne'er a fantastical knave of them all shall flout me out of my calling.” [AYLI 3.3.96-97]) この“fantastical”という語について、オックスフォード版では“odd, irrational, crazy”<sup>96</sup>と解釈し、タッチストーンのおもいについて述べていると注釈している。アー

デン版では“fanciful, grotesque”<sup>97</sup>という注釈をつけている。ケンブリッジ版では“foppish, capricious (OED Fantastic 4b), (2) love-sick” (OED sb. 3b) ”<sup>98</sup>という注釈があり、「めかしこむ、気取った、愚かな、気まぐれな」fancy の装飾性や恋煩いとの関連が示されている。タッチストーンはオードリーに詩における fancy について語っている。

…the truest poetry is the most feigning, and lovers are given to poetry; and what they swear in poetry it may be said, as lovers, they do feign.  
…  
Now if thou wert a poet, I might have some hope thou didst feign. (AYLI 3.3.16-23)

この台詞においても語句・音の反復や“if”の仮定法過去が用いられている点において修辞が強調されている。詩における fancy は修辞やメタファーにおける多義性や両義性であり、表層と深層の意味、真と偽が表裏一体となることを意味し、タッチストーンは fancy における対立の統合を示唆している。(“The fool doth think he is wise, but the wise man knows himself to be a fool.” [AYLI 5.1.30-31]) 続けて、タッチストーンは修辞学や比喩についても述べている。(“For it is a figure in rhetoric that drink, being poured out of a cup into a glass, by filling the one doth empty the other.” [AYLI 5.1.39-42]) この台詞はルネサンスの教育において修辞学やレトリック、つまり、比喩における fancy の要素である対立の統合が重視されたことを示している。このように、変装したロザリンドと道化は言葉を駆使して真と偽を操り、正反対のものを結びつけ逆転させる fancy の働きを体現している。

5幕4場でタッチストーンは詩や fancy における虚偽について述べ、if という語を繰り返している。

<sup>96</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 178.

<sup>97</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre (London: The Arden Shakespeare, 2020), 273.

<sup>98</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 167.

…All these you may avoid but the Lie  
Direct; and you may avoid that, too, with an 'if'. I  
knew when seven justices could not take up a  
quarrel, but when the parties were met  
themselves, one of them thought but of 'if', as 'if  
you said so, then I said so', and the shook hands  
and swore brothers. Your 'if is the only  
peacemaker; much virtue in 'if.

(AYLI 5.4.92-98)

“if”という語は空想を表し、タッチストーンは fancy における虚偽について述べている。また、語句や音の反復は修辞と音楽的な要素が fancy と関連することを示し、特に道化は音楽やダンスというリズムカルな要素と関連している。その後、ロザリンドが真の姿を現し、公爵、オーランド、フィービーのセリフは、fancy の視覚的要素における虚偽が最後に真実になることを示している。

DUKE SENIOR

If there be truth in sight, you are my daughter.

ORLANDO

If there be truth in sight, you are my Rosalind.

If sight and shape be true,

Why then, my love adieu!

(AYLI 5.4.113-116)

このようにロザリンドと道化は演じることを意識している点で、自らが役者となる劇中劇を客観的に演出し、fancy の表象であるロザリンドについて語る台詞もまた語句や音の反復により修辞と関連している。

タッチストーンは「試金石」を意味している。ブリタニカ国際大百科事典は“touchstone”の項目で、“black, siliceous stone used to ascertain the purity of gold and silver. Assaying by“touch”was one of the

earliest methods employed to assess the quality of precious metals.”と定義している。ユング心理学を応用してカウンセリングや分析を行う非営利団体の Touchstone によると、この語は純粹であるかを決定する基準を意味していると定義している。錬金術において、試金石は卑金属を貴金属に変化させる探求を象徴し、心の価値の低い要素を魂の「純金」に変化させる比喩となる<sup>99</sup>。ブリタニカでは、錬金術で使用される「賢者の石」(philosopher's stone) について、「西洋の錬金術では賢者の石は卑金属を特に金や銀のような貴金属に変質させる力があると思われたために錬金術師に求められた」と定義していることから、試金石と「賢者の石」はほぼ同義であると考えられる。澤井繁男は、「自然界の謎を一気に解くことの可能な根源的知識の代名詞といってもよい」と述べている<sup>100</sup>。『お気に召すまま』において、タッチストーンは阿保のふりをして知識を垣間見せ、物事の両極を対比して吟味していることから、劇中で試金石や「賢者の石」の働きをし、ロザリンドの錬金術師や魔術師としての側面と関連している。

## 他作品との関連

以下のジェイクイズの台詞はシェイクスピアの演劇観を表していることで有名である。

All the world's a stage,

And all the men and women merely players.

They have their exits and their entrances,

And one man in his time plays many parts…

(AYLI 2.7.139-142)

全世界が一つの舞台であり、そこでは人間はすべて役者に過ぎず、一人一人が生涯色々な役を演じ分けるという考えは、人間が多様性や多義性を持ち、常に仮面や変装によって実体を隠している

<sup>99</sup> Touchstone: <https://www.touchstoneinc.org/>

<sup>100</sup> 澤井繁男『魔術の復権—イタリア・ルネサンスの陰と陽』(人文書院, 1991), 63.

こと、仮象の世界であるこの世という舞台で一生演じ続けなければならないことを示唆している。つまり、この世界自体が fancy であり、人間の存在自体もまた fancy の要素を帯びているということになる。メランコリーに取りつかれたジェイクイズが述べる音楽における fancy は、『十二夜』冒頭の公爵の台詞と関連し、“fantastical”という語が用いられている。“I have neither the scholar’s melancholy…nor the musician’s, which is fantastical…” [AYLI 4.1.10-11]) 『十二夜』は『お気に召すまま』の翌年 1601 年に創作されているので、この時期にシェイクスピアは男装のヒロインと fancy を結びつけることに関心を持っていたと思われる。

『お気に召すまま』の後に創作された『十二夜』は、シェイクスピアの fancy がより洗練された形で表れている。例えば、『十二夜』1 幕 1 場冒頭で、公爵は恋と音楽が fancy の多様性と関連することを示唆している。

If music be the food of love, play on,  
Give me excess of it, that surfeiting,  
The appetite may sicken and so die.  
…  
…So full of shapes is fancy,  
That it alone is high-fantastical.  
(TN 1.1.1-15)

航海中に嵐にあってイリリアの海岸にたどり着いたヴァイオラは、思い付きの fancy によって船長に変装を手助けしてくれるように頼み、公爵に歌を歌ったり音楽の話をしたりして奉公したいと述べる。これは、真の自己を隠して男装するヴァイオラの多様性や装飾性を表す fancy が、音楽と関連することをほのめかしている。また、ヴァイオラの名前自体が楽器のヴィオラを表している。このような fancy と音楽の関連は、『お気に召すまま』においては道化の fancy と音楽やダンスとの関連においても示されている。fancy としてのヴァイオラの軽妙な恋は、メランコリックな公爵の imagination より下位にあるように見えるが、

最後には彼女の公爵に対する愛が真であり、公爵のオリヴィアへの愛の方が偽であることがわかる。公爵のオリヴィアへの愛が自我や男性的理性により生まれる imagination の産物であるのに対し、fancy は男装の女性により表象され、最後には男性的中心が両性具有的で周縁的なヴァイオラの fancy によって覆される。

『お気に召すまま』においても、オーランドのロザリンドに対する愛が自我によるものであるということがロザリンドの台詞に示されている。“You are rather point-device in your accoutrements, as loving yourself than seeming the lover of any other.” [AYLI 3.2.364-365]) ここでロザリンドはオーランドが他者を愛するのではなく、自我にとらわれていることを指摘している。また、既述のように 1 幕においても陽気なロザリンドと対照的にメランコリックなオーランドが描写されている。

ジェイクイズはメランコリーについて次のように述べている。

I have neither the scholar’s melancholy, which is Emulation, nor the musician’s, which is fantastical, nor the courtier’s, which is proud, nor the soldier’s, which is ambitious, nor the lawyer’s, which is politic, nor the lady’s, which is nice, nor the lover’s, which is all these; but it is a melancholy of mine own, compounded of many simples, extracted from many objects, and indeed the sundry contemplation of my travels, in which my often rumination wraps me in a most humorous sadness. (AYLI 4.1.10-19)

この台詞において、imagination と fancy の要素が混在している。imagination の要素としては、学者のメランコリー、黙考、悲しみであり、fancy は音楽、観想と関連している。音楽家のメランコリーは“fantastical”であるが、これは「(しばしば愛と関連する)空想にふける」ことを意味し、恋人たちはすべてを含むとされる。“nice”は「気難しい、潔癖すぎる」という意味と「気まぐれな、み

だらな、浮気な」という反対の意味を含む。<sup>101</sup>つまり、女性のメランコリーは対立の統合であり fancy と関連している。“humorous”は「奇妙な、ジェイクイズに特有の」<sup>102</sup> という注釈をつけている。これはホプキンズの空想概念では fancy の要素である。ジェイクイズは自分のメランコリーには独自性があり、「多くの客体から抽出されたものが混合し、旅の観想」であると述べている。日本大百科全書によると、「観想」(contemplation 英語；theōria ギリシア語；contemplatio ラテン語)とは「『眺める』を意味する古代ギリシア語の動詞 theōrein に由来し、世界の存在事物を、そのあるがままの姿で眺める」ことである。これは客体を客観視するという視覚的な行為なので、客体と関連する fancy と結び付く。このように、ジェイクイズのメランコリーには imagination と fancy の要素が混在していることがわかる。また、ブリタニカ国際大百科事典によると、観想は「新プラトン派やグノーシス派などの神秘思想、宗教において、生成消滅するもろもろの事象の背後にひそむ超感覚的、超越的存在を直観すること、あるいは神的存在と合一することをいう。」客体や観想はホプキンズの空想概念において fancy の要素とみなされる。

『十二夜』の幕切れで公爵はヴァイオラのことを「恋 (fancy) の女王」(5 幕 1 場 378 行)と呼び、従者として公爵に仕えたヴァイオラが最終的に公爵より上の立場となって、地位が逆転することが示される。(“But when in other habits you are seen, / Orsino’s mistress, and his fancy’s queen.” [TN 5.1.378-379]) 『十二夜』では最初と最後に “fancy” という語が強調されている。男装のヒロインが登場する劇における fancy について比較すると、『ヴェニスの商人』、『お気に召すまま』、『十二夜』において、fancy の力によってヒロインたちは最終的に愛する男性と結ばれ、心に秘めた真の願いを叶えることがわかる。

## 結論

『お気に召すまま』では、『ヴェニスの商人』、『十二夜』と同様に男装するヒロインが登場し、一目ぼれという視覚的要素が強調され、『夏の世の夢』のように森で fancy が繰り広げられる。『お気に召すまま』は仮面劇であったため変装という fancy が最初から重視され、真相の意味を隠す fancy が特徴的な劇であり、シェイクスピアの fancy を最もよく表す劇であると考えられる。

fancy は一目ぼれという視覚的要素と関連し、詩においては修辞や比喩と関連する。『お気に召すまま』において、男装するヒロインは詩語や比喩の多義性を表象している点で、修辞や装飾・外面の美・陽気さ・未来・錬金術などとも関連していることについても考察した。ロザリンドがオーランドに森で恋と修辞のレッスンをを行い、錬金術において卑金属が金に変化するようにオーランドも変化し、錬金術の図像において最終段階である結婚に至る。結婚の神ハイメンも最後に登場し、錬金術のように異教的要素が多く見られる。オリヴァーとシーリア、ロザリンドとオーランド、シルヴィアスとフィービー、タッチストーンとオードリーとの大規模な結婚が行われ、fancy の表象であるロザリンドのエピローグで締めくくられる。登場人物たちは変化し自己実現を果たすが、悪役であったフレデリックも最後に改心して兄の侯爵に玉座を返す。本論では『お気に召すまま』の深層の意味として対立を統合するロザリンドと錬金術のイメージがあり、最終的に自己実現としての結婚が主題となっていることに注目した。

また、異教的な要素が多い中で、キリスト教的な聖餐や受難も描写され、異教とキリスト教の対立の統合が見られる点において、錬金術が異端的な新プラトン主義やグノーシス主義と関連しているということを、この劇は暗に示していると思われる。これらの点についてはホプキンズの空想概念の研究の素地があって気付いたことであり、

<sup>101</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Michael Hattaway (NY: Cambridge UP, 2009), 177.

<sup>102</sup> William Shakespeare, *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden (Oxford: Oxford UP, 1993), 187.

コールリッジ、ラスキン、ホプキンズという後の時代の文芸批評家や詩人が研究したからこそ、本論において『お気に召すまま』という劇の fancy が意味するものと、シェイクスピアの詩語の奥深さを理解できた。『お気に召すまま』において様々な要素が散りばめられ、項目別にまとめるのが困難だが、部分における多様性とパラレリズムが強調された劇であり、シェイクスピアの fancy の特徴をよく表している。本論文はセミナーでの発表原稿を基に書き始めたのだが、執筆中に錬金術の表象に気づき大幅に内容を変更し、錬金術のイメージを中心に論じた。『お気に召すまま』において、あまりにも錬金術のイメージが満載であることを実感したからである。

### 謝辞

2022年10月2日に甲南大学に於いて開催された日本シェイクスピア協会第60回シェイクスピア学会のセミナーで発表させていただき、立命館大学の竹村はるみ先生、大阪芸術大学の野田恵美子先生、セミナーメンバーの皆様から貴重なご意見をいただいたことに感謝いたします。また、これまでの私の空想概念の研究が、『お気に召すまま』にとっても当てはまることや、fancy の新たな側面についても確信を得ることができました。

今回の発表とは直接関係していませんが、これまでホプキンズ研究でお世話になった上智大学名誉教授のピーター・ミルワード先生がシェイクスピアやファンタジーを研究されていたので、天国から見守ってくださっているように思いました。また、大阪大学大学院文学研究科でルネサンス演劇をご指導して下さった石田久先生、斎藤衛先生、藤田実先生、先輩の山田雄三先生、コールリッジの想像力と空想について博士論文でご指導して下さった広島大学大学院文学研究科教授のデイヴィッド・ヴァリンズ先生、京都産業大学名誉教授の田村謙二先生にも感謝申し上げます。この論文を書いているうちに錬金術の表象に気づき、化学とも関連しているのも、まさに fancy によりひらめきを得て書いた論文になったと思います。最後になりましたが、大阪医科薬科大学薬学部雑誌

編集委員の先生方に大変お世話になったことを感謝申し上げます。

### 参考文献

- Abrams, M. H., Ed. *The Norton Anthology of English Literature*. Vol. 1. London: W. W. Norton & Co., 1962.
- Bate, W. J. *From Classic to Romantic: Premises of Taste in Eighteenth Century England*. Cambridge, MA: Harvard UP, 1946.
- , *Shakespeare and the English Romantic Imagination*. Oxford: Clarendon Press, 1989.
- Coburn, Kathleen. *The Self Conscious Imagination: A Study of the Coleridge's Notebooks in Celebration of the Bi-centenary of his Birth 21 October 1772*. London: Oxford University Press, 1974.
- Coleridge, Samuel Taylor, *Biographia Literaria*. Ed. James Engell and W. Jackson Bate. 2 vols. Princeton: Princeton UP, 1983.
- , *Coleridge's Notebooks: A Selection*. Ed. Seamus Perry. Oxford: Oxford UP, 2002.
- , *Lectures and Notes on Shakespeare and Other English Poets*. London: Chiswick Press, 1893.
- , *Table Talk*. Ed. Carl Woodring. 2 vols. Princeton: Princeton UP, 1990.
- Edgecombe, Rodney Stenning, "Lucretius, Milton, and 'L'Allegro', 19-20, 24 Mar 2010.
- Harris, Laurie Lanzen. Ed. *Shakespearean Criticism*. Vol. 1. Michigan: Gale Research Company, 1984.
- Hopkins, Gerard Manley, *The Journals and Papers of Gerard Manley Hopkins*. Ed. Humphry House. London: Oxford UP, 1959.
- , *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges*, ed. with notes and Introduction by Claude Collier Abbott. London: Oxford University Press, 1959.
- , *The Poems of Gerard Manley Hopkins*. 4th ed. W. H. Gardner and N. H. MacKenzie. London: Oxford UP, 1970.
- , *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins*. Ed. N. H. MacKenzie. Oxford: Clarendon Press,

- 1990.
- Lichtmann, Maria R. *The Contemplative Poetry of Gerard Manley Hopkins*. Princeton, NJ: Princeton UP, 1989.
- Milton, John. *L'Allegro, Il Penseroso, Comus, Lycidas*. Ed. Edward S. Parsons, Boston: Benj. H. Sanborn & CO., 1900.
- Robinson, Jeffrey C. *Unfettering Poetry: Fancy in British Romanticism*. NY: Palgrave Macmillan, 2006.
- Ruskin, John. *Modern Painters*, vol. I-III. Ed. Ernest Rhys. London: Everyman's Library, 1907.
- Shakespeare, William. *As You Like It*. Ed. Alan Brissenden. Oxford: Oxford UP, 1993.
- . *As You Like It*. Ed. Juliet Dusinberre. London: The Arden Shakespeare, 2020.
- . *As You Like It*. Ed. Michael Hattanway. NY: Cambridge UP, 2009.
- . *The Merchant of Venice*. Ed. M. Mahood. Cambridge UP, 2003.
- . *Twelfth Night, or What You Will*. Ed. Warren and S. Wells. Oxford: Oxford UP, 1998.
- . *Twelfth Night, or What You Will*. Ed. R. Warren and S. Wells. Oxford: Oxford UP, 1998.
- Tanabe, Kumiko. "Fancy, Come Faster': Hopkins's Poetics of Fancy as the Language of Inspiration". *The Hopkins Quarterly* Vol. XL, Nos. 1-2 WINTER-SPRING, 2013.
- . *Gerard Manley Hopkins and His Poetics of Fancy*. Newcastle upon Tyne: Cambridge Scholars Publishing, 2015.
- . "The Fancy on Witches in the Nineteenth Century Viewing from *The Lancashire Witches*", *Journal of Modern Education Review*, ISSN 2155-7993, Volume 9, No. 9, 609-618.
- Tomarken, Edward. Ed. *As You Like It from 1600 to the Present: Critical Essays*. London & New York: Routledge, 2009.
- Zaniello, Tom. *Hopkins in the Age of Darwin*. Iowa: University of Iowa Press, 1988.
- 赤川裕『英国ガーデン物語 庭園のエコロジー』研究社出版, 1997年.
- 原孝一郎『幻想の誕生—イメージと詩の創造—』柏書房, 1995年.
- 林道義『ユング』清水書院, 2007年.
- G. ジェニングズ著, 市場恭男訳『エピソード魔法の歴史—黒魔術と白魔術』教養文庫, 1987年.
- ベン・ジョンソン著, 大場健治訳『錬金術師』国書刊行会, 1991年.
- 木村泰司監修『名画で読む! 神話とおとぎ話の世界』公栄社, 2016年.
- 木島俊介監修『ギュスターヴ・モロー』東京新聞, 2005年.
- スタニスラス・クロソウスキー・デ・ロラ著, 種村季弘訳『錬金術—精神変容の秘術』平凡社, 1990年.
- ガイ・オグルヴィ著, 藤岡啓介訳『錬金術—秘密の「知」の実験室』創元社, 2012年.
- 岡村俊明『シェイクスピアを読む』朝日出版社, 1991年.
- 澤井繁男『魔術の復権—イタリア・ルネサンスの陰と陽』人文書院, 1991年.
- 山口昌男『道化の民俗学』ちくま学芸文庫, 1993年.
- <https://1000ya.isis.ne.jp/0830.html>
- Touchstone: <https://www.touchstoneinc.org/>